

伊香保志 卷一





伊香保  
温泉志

五曜文庫

伊香保

明治十五年壬午四月

伊香保志



波

福



師

温

己卯之秋

研堂



群馬縣令楨取素彥君

題詩



柴道算象煙上揚人家樓  
壑路登々半古層象衝  
層起重閣飛樓層又層  
華清樓閣屹巍々畫棟朱

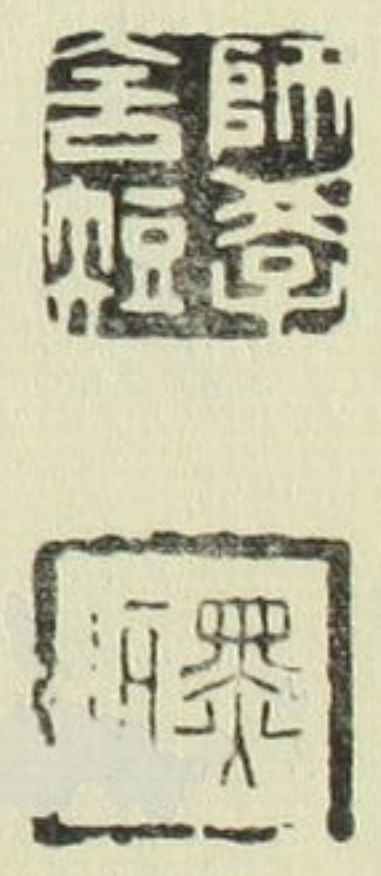
簾倚翠冰一自璇宮停玉  
輦槽湯今日有光輝

人道汝功宜學生香山靈  
水古多情小樓簾影吟  
悟語琴瑟相和夜雨聲

枯草蘓兮病骨仙奇功  
萬容誇靈泉闔鄉汝得  
汝解水又浴山邨幾頃田  
興疾溪山空萬千煙霞喚  
我枉流連汝餘刻乃一枝

葦草起香湯志幾篇

己卯秋日秋萍居士題



白里生書



序言

一 去年の八月廿の暮暑中の暇賜を蒙りて上野なる  
 伊香保乃温泉子ゆゆみせんやと出でたる日九日  
 子伊香保ある湯戸木暮八郎ぬしのやみり到着はぬ  
 その家々をめぐりて定めて近きゆきをり榛名二の嶽  
 船尾ふんどいへる山より諸勝観めむ里をなして、ゆき  
 日を送るたつ回し頃をり遊する人々の中より中芳  
 男、鱸松塘、森春濤、岸田吟香等の大人たちをかひも  
 睦むか、中あはれ日おやんち集ひ家のつらじをり  
 交へりうり、酒をり真じて暑をも忘まてり



ある時、ゆゑの以んらくあつて、決りせんや、年々、末  
 まは、六人のいと多あがほ、あぐま、何や、はま、六の土地  
 の事、語、聞、うせ、せん、や、ま、と、そ、古、事、の、跡、を、記、し、傳  
 へ、た、書、ども、を、喜、し、や、と、ど、ま、む、く、向、も、た、れ、ど、往、時、と、ま  
 そ、れ、の、事、書、お、ま、る、一、書、や、と、そ、う、つ、り、喜、と、又、向、く  
 に、語、ら、ん、も、い、と、ま、い、る、あ、ど、ま、れ、び、の、を、先、生、の、ゆ、ゆ、み、せ、ら  
 多、い、と、ぬ、び、と、り、六、の、事、物、も、れ、郷、人、も、を、つ、る、可、い、の、ふ  
 客、人、多、も、れ、便、互、ま、や、あ、ん、や、語、ま、り、そ、も、く、六、の、事、  
 を、去、年、の、夏、家、兄、如、雷、大、人、が、六、の、家、に、達、せ、れ、し、頃、も  
 を、や、り、思、ひ、お、と、ま、れ、と、ま、づ、い、ま、ど、果、を、何、を、け、ら、る、

序言

よ、め、み、や、と、い、づ、る、時、も、い、の、を、あ、び、を、我、子、代、月、筆、執、り  
 と、な、の、言、と、い、し、も、何、事、も、れ、ど、や、た、を、遊、留、の、間、に、  
 書、き、は、り、あ、つ、て、伊、香、保、志、と、題、せ、し、が、六、の、書、を、つ、ら、る、  
 旅、の、や、が、り、こ、を、文、獻、の、徴、と、い、ふ、も、の、い、り、く、之、し、と、  
 六、の、一、れ、損、め、あ、る、を、た、る、も、足、り、な、れ、と、い、ふ、み、せ、れ、  
 て、み、や、つ、り、歸、還、し、後、も、淨、書、も、を、な、り、つ、り、六、の、  
 頃、ゆ、と、ま、あ、く、その、甚、禍、を、出、し、て、竹、中、邦、香、君、に、い、し、  
 り、君、い、う、め、を、や、つ、が、れ、費、を、出、し、て、板、子、上、ま、ん、し、  
 以、て、せ、し、し、た、ま、ん、や、その、い、ま、か、ゆ、に、木、暮、ぬ、し、は、も  
 是、の、由、林、を、い、れ、し、が、い、と、喜、び、板、子、上、ま、ん、と、を、大、人、な、り



この事おきり同好の人に告ぐを如く申す京より物多  
く携へんとまきりすづくをた便びんは人々を京と高寄との  
間乃鐵道のむくももまやと成就をんをそひくまきり  
待ちてのまきりすづくを

明治十三年庚辰秋月

秋澤居士記

伊香保志引用書目

續日本後紀

文德實錄

三代實錄

延喜式

萬葉考

上野歌解

古史傳

和名類聚抄

倭論語

夫木集

北國紀行

宗祇終焉記

東路の裏

箕輪軍記

和漢三才圖會

諸國廢城考

國華萬葉集

山吹日記

文布

伊香保道乃記

赤城紀行

漫遊文草

更衣日記

木曾名所圖繪

江戸名所圖繪

上毛志料并圖

上野名跡志

富士見十三州圖

伊香保村誌

伊香保神社縁起

木暮氏舊記

日本地誌提要并圖

熊谷縣一覽表并圖

群馬縣一覽表并圖

伊香保道中記

東京より上州伊香保に至る行程を凡三十四五里あり日本

橋より西北板橋驛より出で中仙道の上州高崎まで行く

此の間二十八里を官道の驛々あり往來繁盛にして自在に

馬車東京萬世橋の由より日こ多崎人力車馬駕籠と通じし

今先その路をあらふる村驛里程名勝舊跡等の大略を記す

べしこの路より伊香保まで

東京日本橋板橋へ二里本郷追分より左へ駒込巣鴨を過ぐ

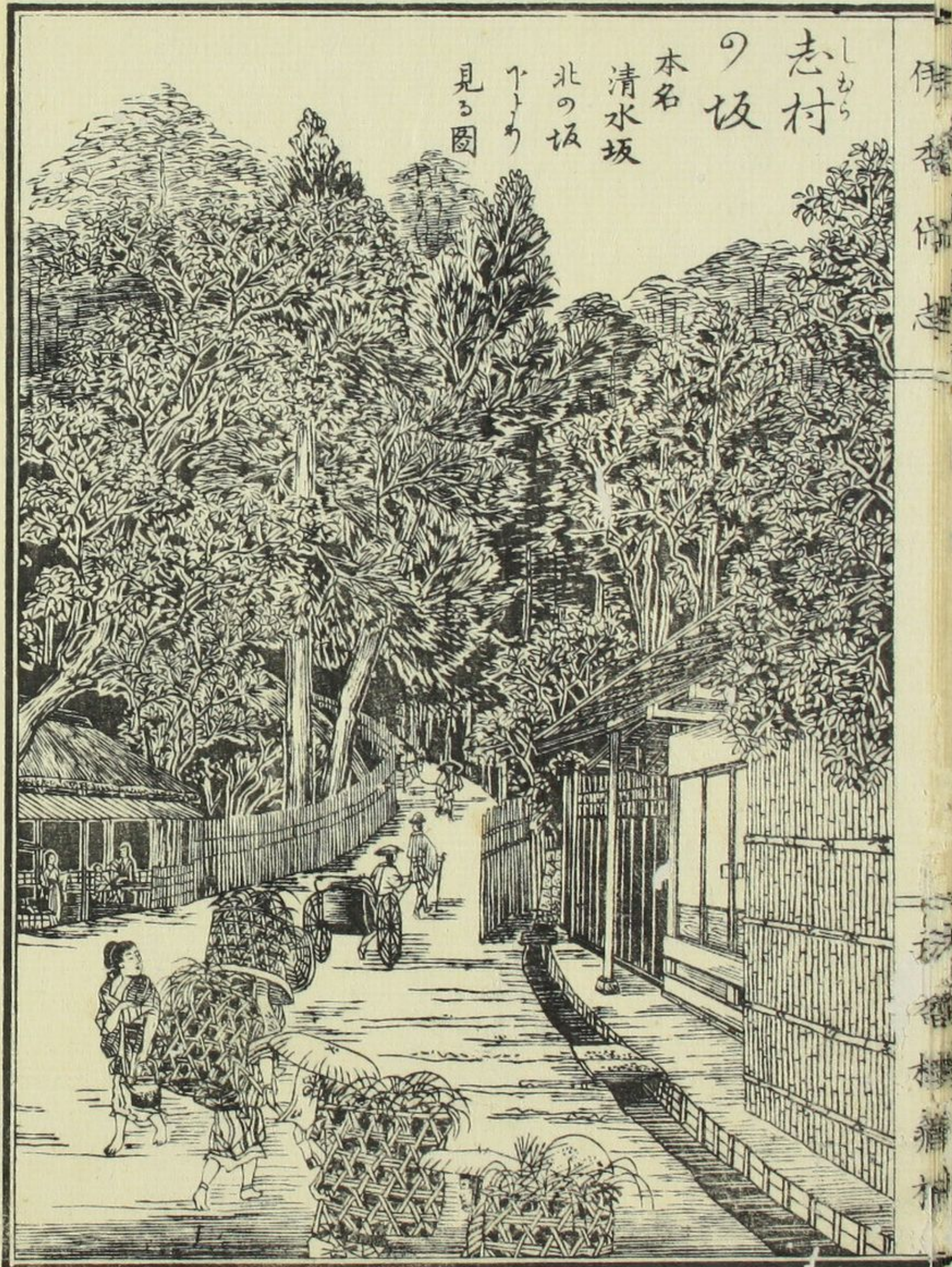
板橋驛蔵へ二里中仙道の第一驛はして酒店妓楼簷を列ぬ

戸数六百五十人口驛中を流る石神井川此より西ある三寶寺の池より出で下を王子村

伊香保道中記



伊香保志



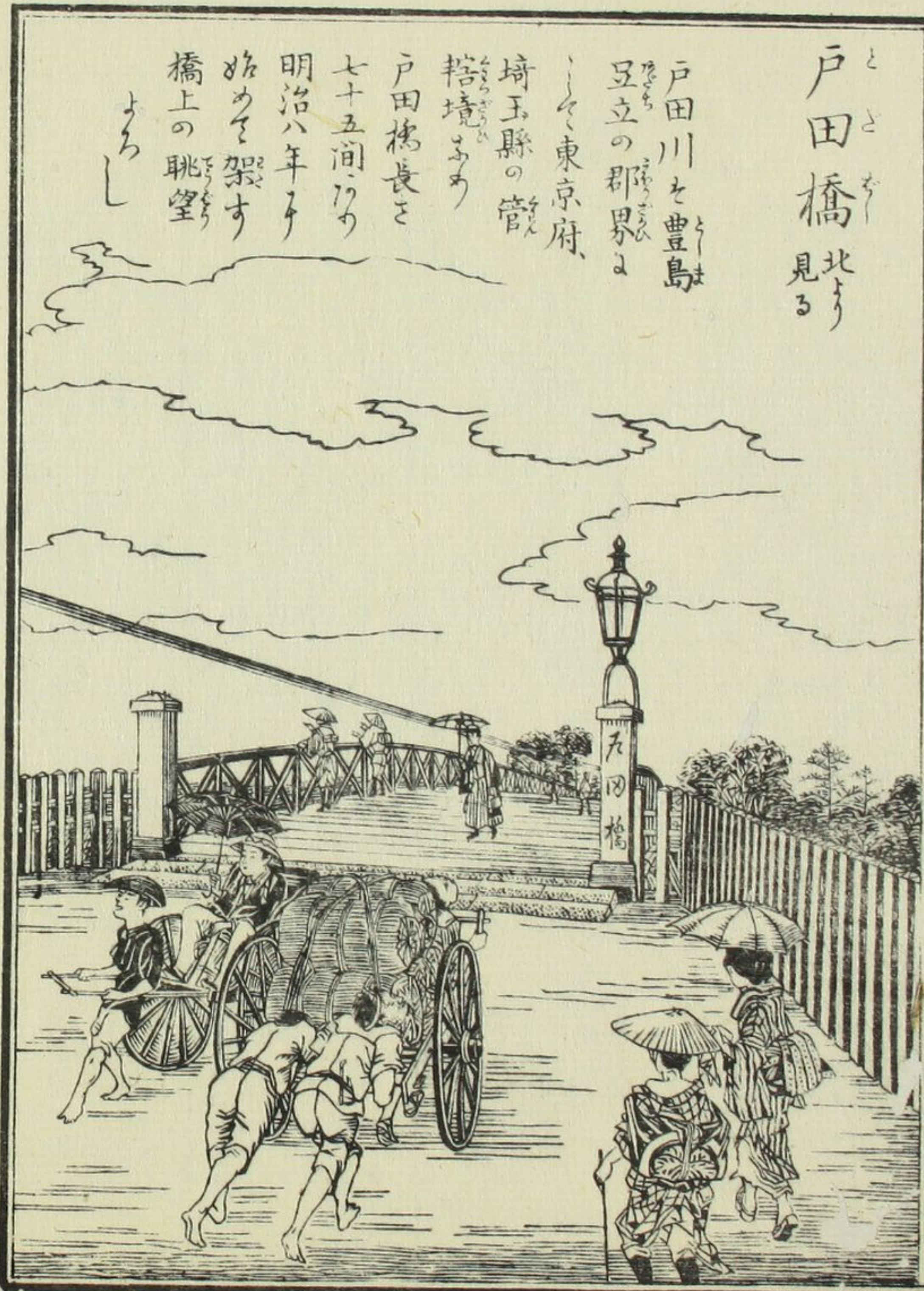
伊香保志  
 志村しむら  
 の坂  
 本名  
 清水坂  
 北の坂  
 下より  
 見る図

伊香保志

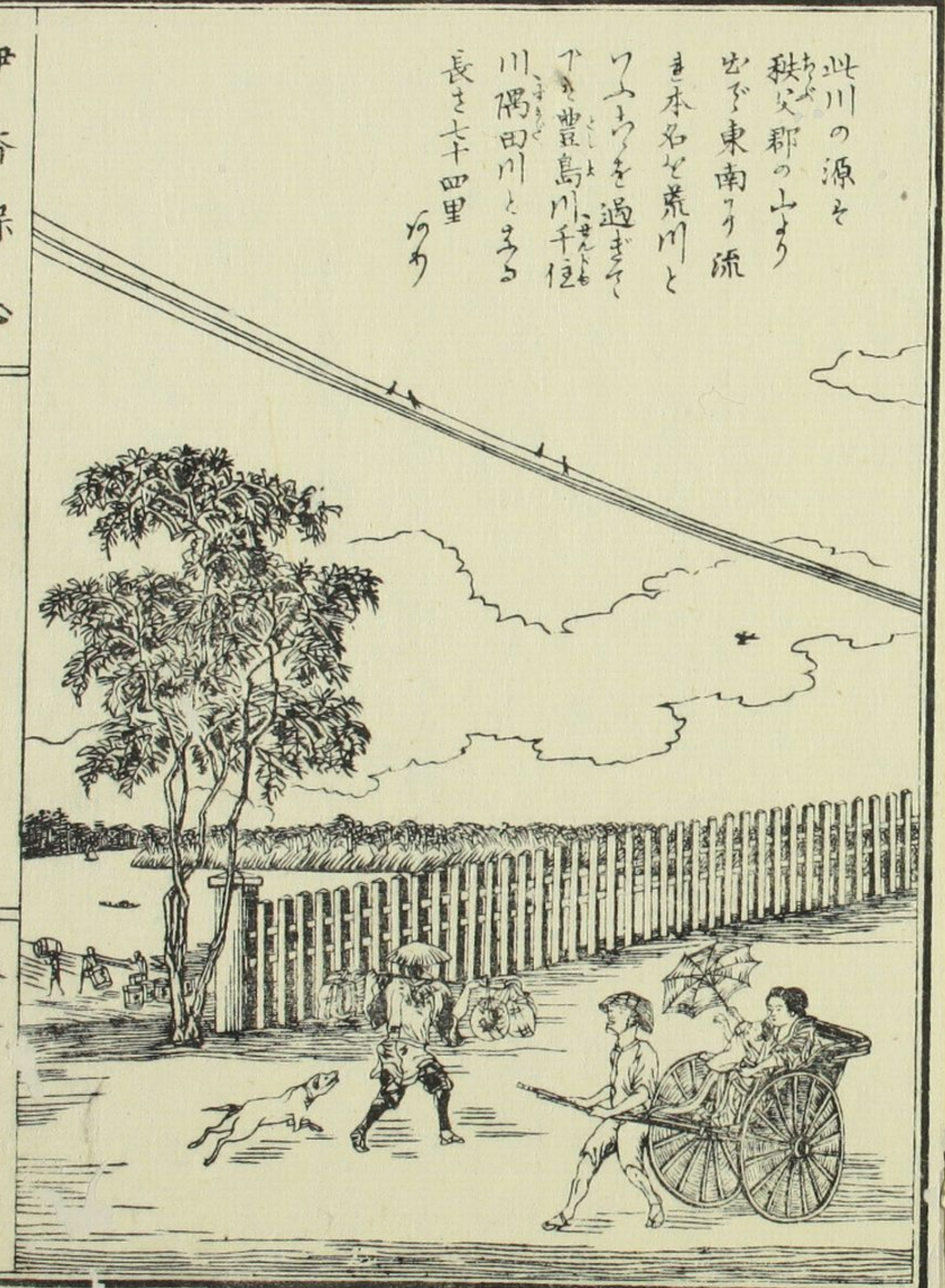
明

戸田橋 北より見る

戸田川を豊島  
互立の郡界と  
し、東京府  
埼玉縣の管  
轄境とあり  
戸田橋長と  
七十五間あり  
明治八年に  
始りて架す  
橋上の眺望  
よし



此川の源を  
秩父郡の山より  
出で東南に流  
る本名を荒川と  
し、これを過る  
下り豊島川千位  
川隅田川と云ふ  
長さ七十四里  
あり

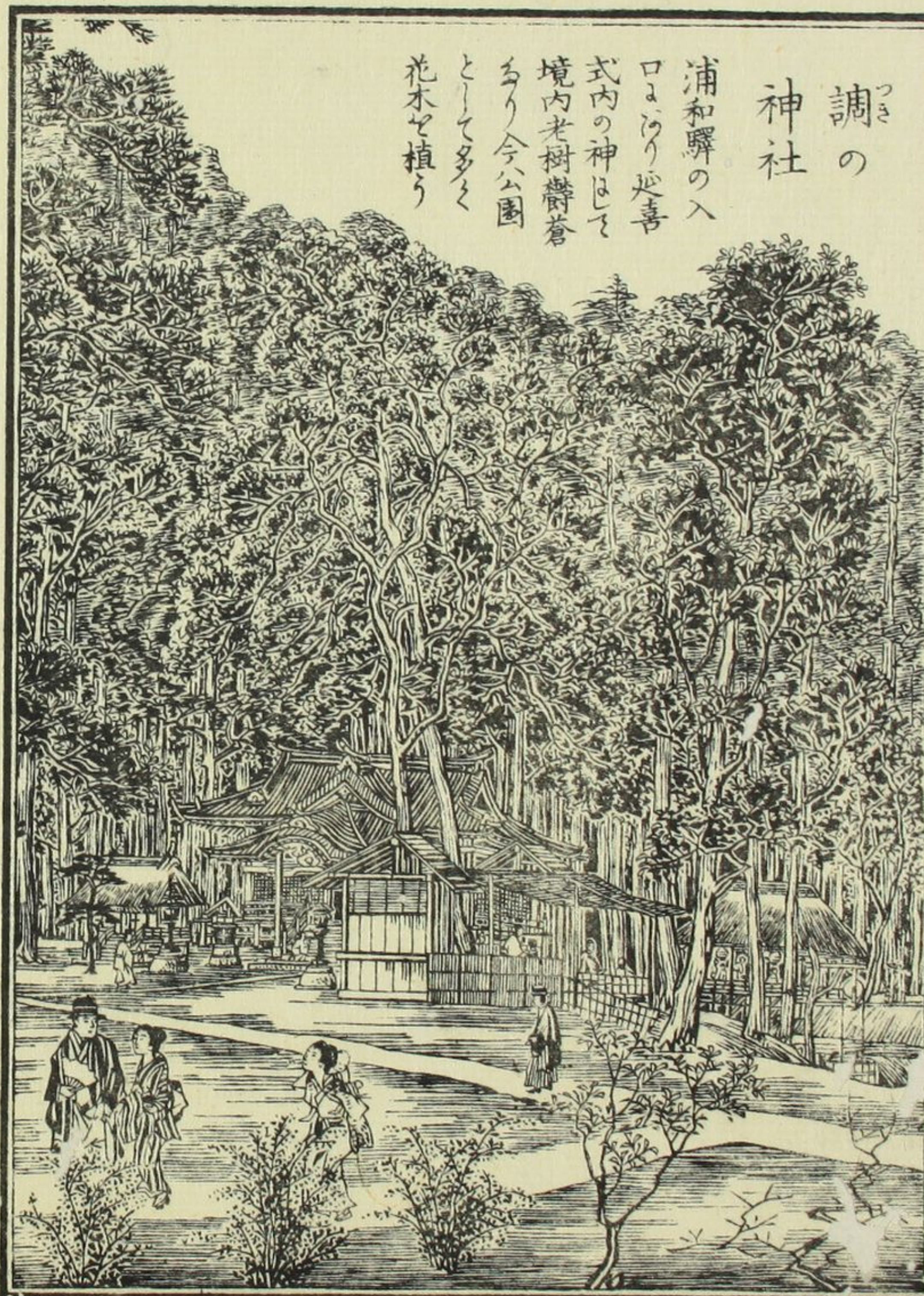


と歴て瀧川とふみそ小橋を渡り板橋の名を起す  
 千住川入る  
 驛の出口路の傍左側より縁切榎あり今枯きて幹のみ  
 存す 祈まが男女の縁と断つと云 ○一里許はして志村の坂より下り坂を  
 險し ○坂より西へ續きたる岡を千葉氏の城趾あり熊野  
 の社あり ○坂の崖下より清水薬師あり此の空清水多と  
 涌く 清水種とて夏大 根と名産とす ○坂の下より戸田川まが二十町一  
 面の平地より茅原多とて風景好し 春の櫻草夏の虫 秋の草と名あり ○戸田川  
 戸田橋を架す渡をまが戸田村あり路の左の小高き敷あり  
 羽黒の社あり榎の樹の又あり 霊泉出づ  
 蔵驛 東京より四里三十町 驛の東より足利氏の頃の關東探題府の  
 半浦和へ一里九町半

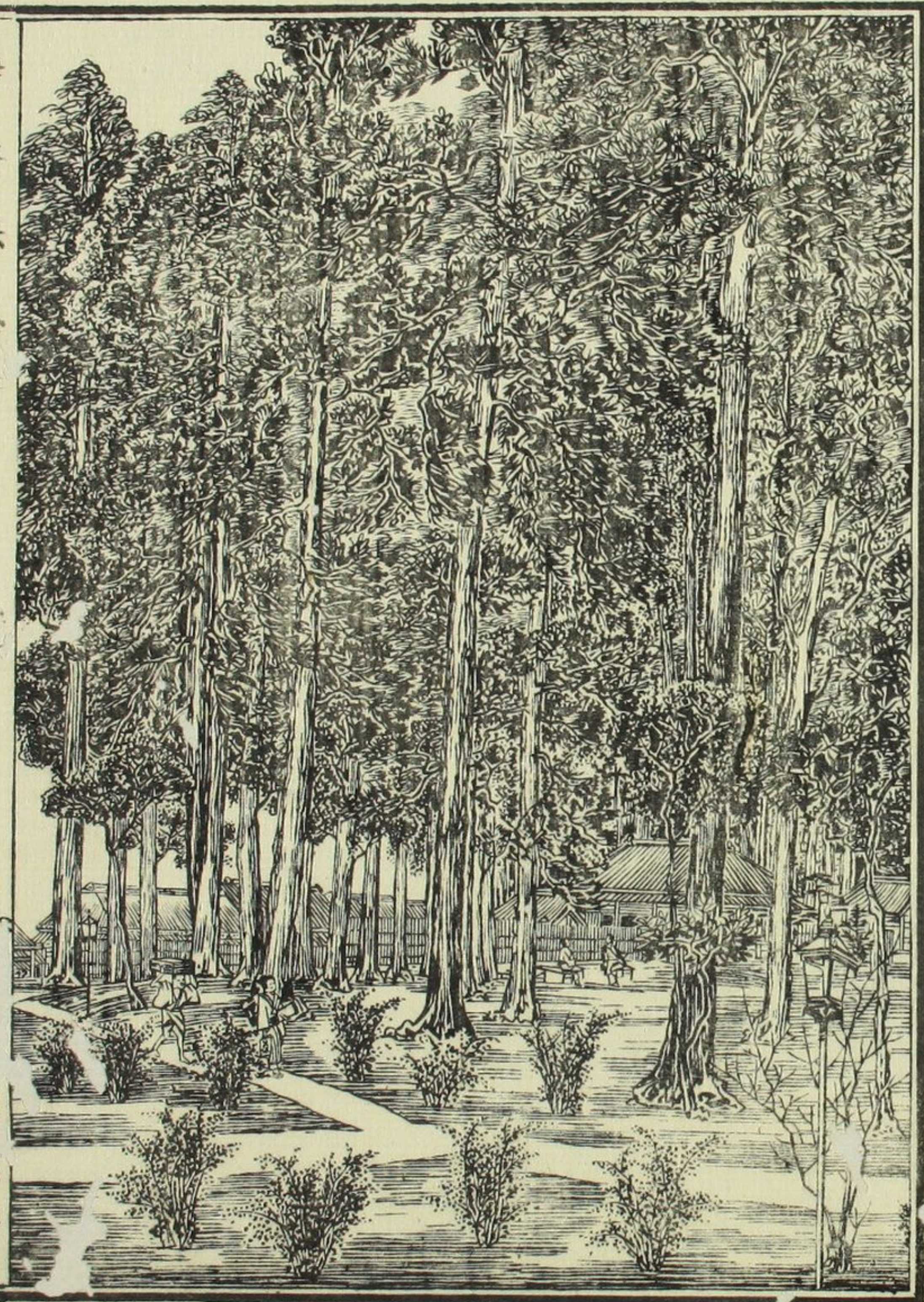
跡あり 澁川左衛門 白幡村の街道より焼米坂あり 焼米を賣り  
 浦和驛 東京より六里四町 驛の入口の右より調の神社あり延喜式内  
 の神あり 社地老樹鬱蒼たり今公園とまき花木を植り  
 博物館あり此驛を埼玉縣廳ありる敷にそその外師範学  
 校熊谷裁判所支廳電信局ありて賑し 三百八十餘戸 千七百五十人 當  
 縣を武藏國十六郡九十餘萬石九十萬四千餘人と管す ○  
 一里許行るが街道の左右数町の間原あり大宮の原と云  
 中野より六國見あり西北より六ヶ國の山と見え敷ありあり  
 大宮驛 東京より七里廿二町 武藏の一の宮あり氷川神社ありを驛  
 の名あり ○驛の入口あり大鳥居あり夫より松の並木十八町

調つぎの  
神社

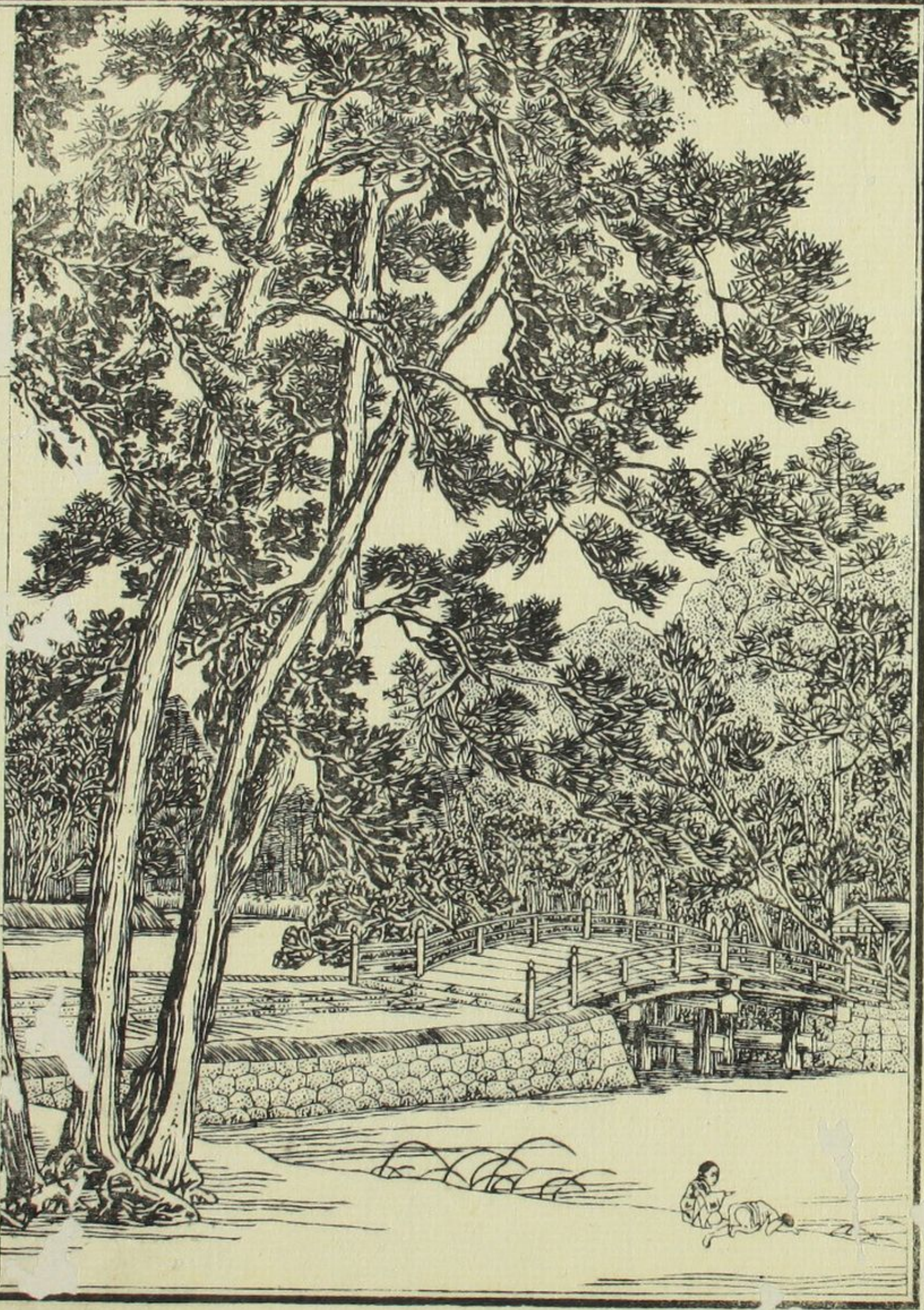
浦和驛の入  
口より延喜  
式内の神は  
境内老樹鬱蒼  
多し今公園  
として多く  
花木を植う



附ノ四







大宮驛  
氷川  
神社



入里氷川神社ひがしの當社たつら 延喜式名神大座えんぎしき 七奉本篇中卷しちほうほんぺんちゆうまき 香保神社かほ

部べの神はして孝昭天皇の時かうせう 二千出雲の簸いづぶの川上かみ 故子氷こすひ

杵築乃大社きづきのを遷座せんざせしあり日本武尊東征の時やまとたけのみこととうせい 當社たうしゃを祈いの

誓ちかりり平貞盛へいさだもりが將門退治の時まさかどとをらぢ 願書ねんじよを籠こめ頼朝よりともの神田寄かんだんき

附つもあり徳川家の世とくがわを 神領かみりやう三百石さんひやくしやく 官造くわんぞうの社しゃあり 明治元年めいし 十月廿七日じゅうがつにじゅうにち

今上御參詣いまのじやうごさんぎりりて今官幣大社くわんぺいだいしゃに列せりり ○ 間の宿天神まのしゆくてんじん

橋はし石物いしものは 上尾驛かみせ 東京より九里廿三町とうきやうよりくわんりにさんぢゆう 地ぢに紅花べにばなの産うり

桶川驛おづがわ 東京より十里廿四町とうきやうよりじゆりにじゆうぢゆう 驛えき中なかつに淨念寺じやうねんじあり 淨土じゆつど

鴻の巣驛こうのす 東京より十二里廿四町とうきやうよりじふにりぢゆうぢゆう 繁華はんかあり 宿しゆくに印いんあり 七百四十戸しちひやくしじゆ 三千二百四十人さんにひやくしじゆにひやくしじゆにん

浄土宗勝願寺じやうつじゆせんじゆせんがんじの東十八壇林とうじちはたんりんの一あり ○ 宿しゆくに二十町にじゆうぢゆう

行き箕田村路みいたむらぢの右みぎに八幡宮やまはたみやうあり 渡邊わたべの綱つなが出立でだての地ぢあり

東京とうきやう芝三田しばさんでんとあるを 傍かたはらに碑いあり ○ 右みぎに忍行田路しのぎやうでんぢあり 二里にり

此こゝの地ぢと誤あやまるとあり 間の宿吹上まのしゆくふきあが 石物いしもの點ぢの ○ 久ひさ下げ村むらより熊谷くまがやの土手どてあり

熊谷驛くまがや 東京より十七里四町半とうきやうよりじちりしじゆうぢゆうはん 此こゝに茅かや一繁華いちはんかの地ぢあり 四方七しやうはつしち

街道かいだうの繼立つぎたて場ばより絹綿きぬわたあり 産物さんぶつ皆みな此こゝに集あり 千せん

十戸じゆしほ、四千しよせん 熊谷裁判所くまがやさいばんしよ 師範しはん分校ぶんがうあり 宿しゆくの右側みぎがはに高城たかぎの神かみ

社しゃあり 式内しきないあり 又また當地ちやうぢを熊谷次郎直實くまがやじらうぢきの舊地ふるぢにして驛えき乃な

中なかつ程ほどの右みぎに入里蓮生山いりせんぜんさん 熊谷寺くまがやじあり 直實ぢき出家しゆけして蓮生れんぜんと

稱なづし開基かいきに寺てらあり 小像遺物せうざういぶつあり 安永あんえい二年にねん本堂ほんだう焼や失しし再建さいけんあり

熊谷堤

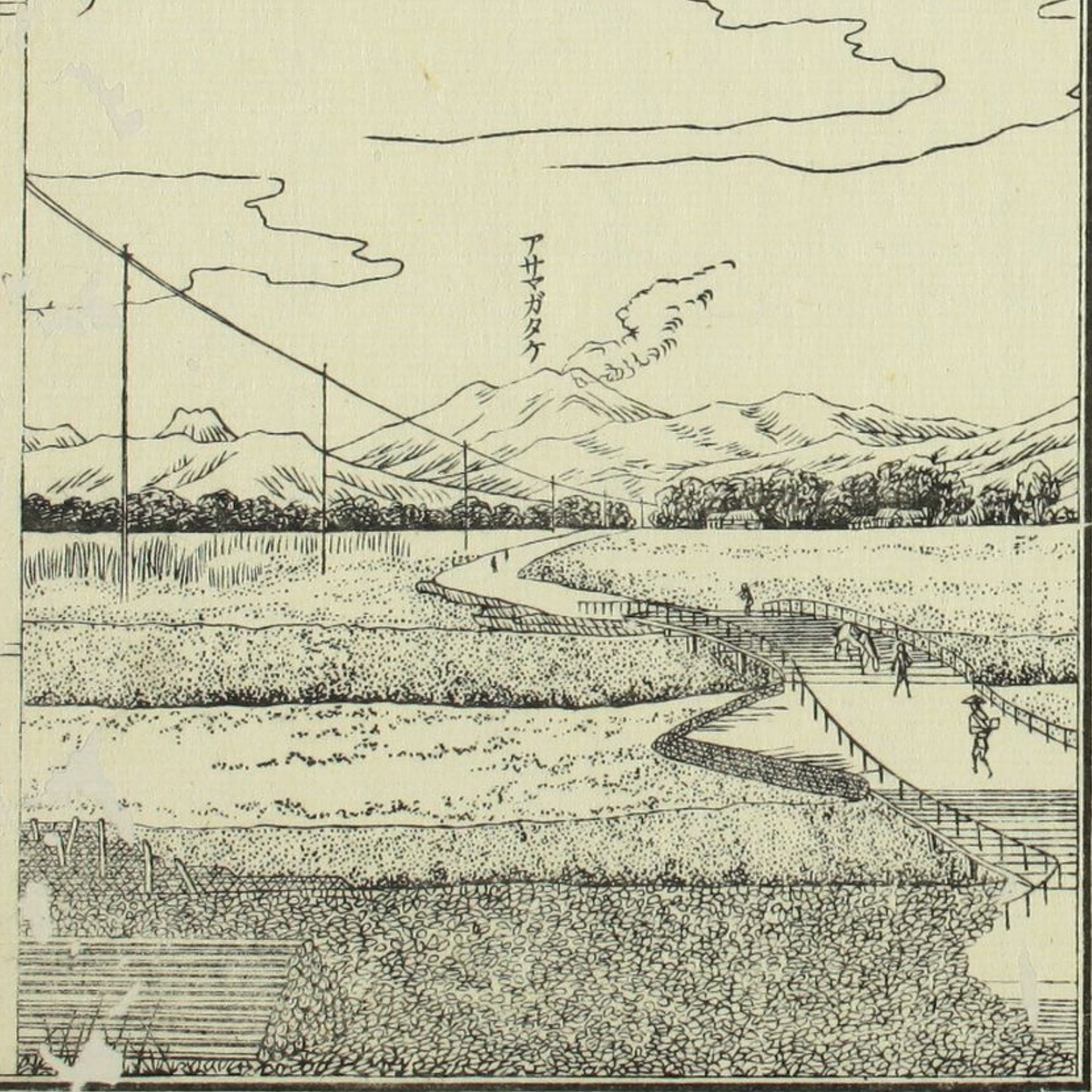
左に流るる荒  
川の堤防は  
此堤千住まで  
連なるこの處  
三十町許の間



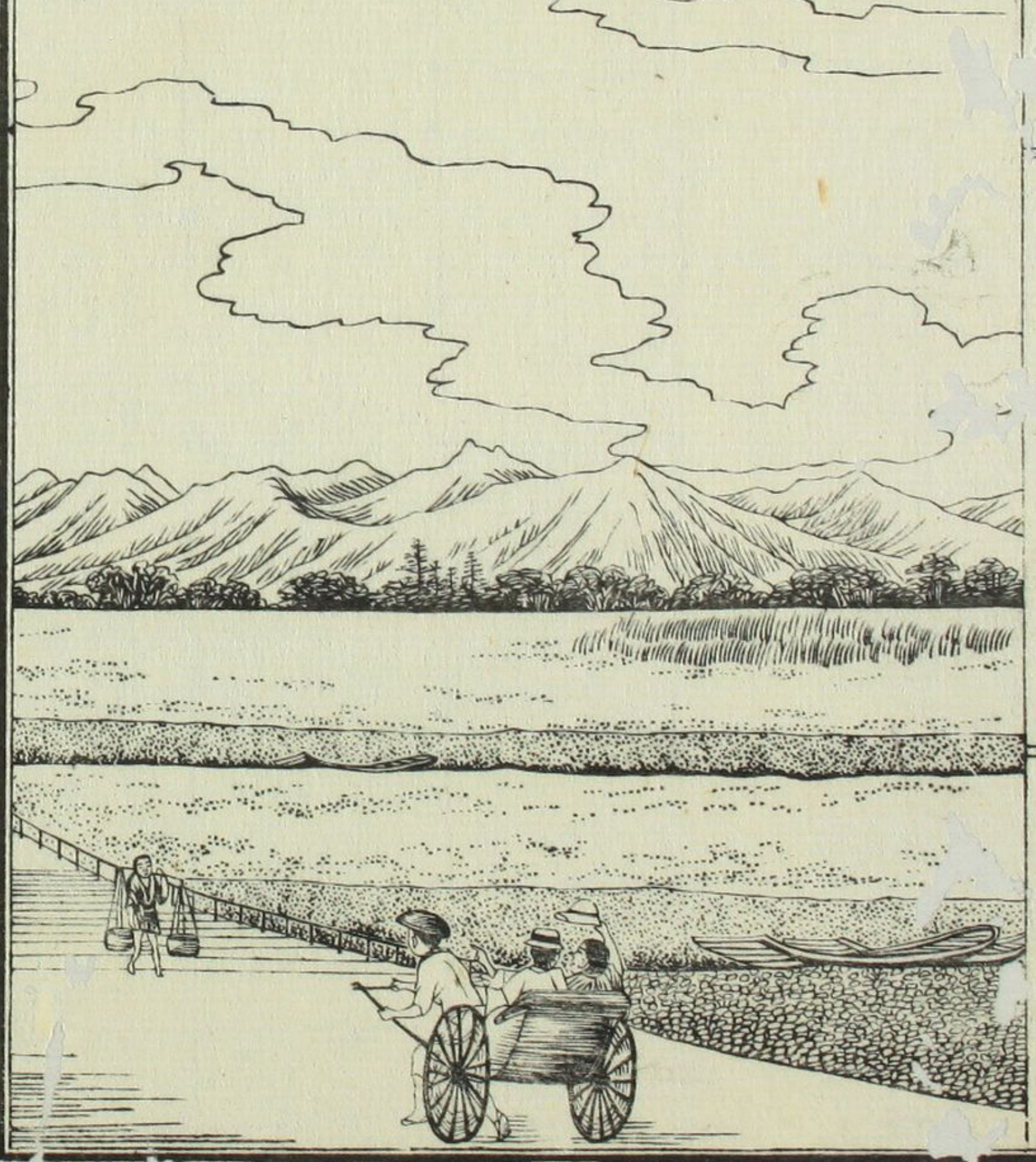
堤の上を街道  
と云西北の山々  
を眺め景色  
よめ北の方を  
伊香保の山々  
見ゆ



常よを水  
 多く假橋あり  
 此處を天  
 正十年小  
 田原の北條  
 氏直と厩橋今この  
 の瀧川かま一益との  
 古戰場あり川の源を  
 これより西ある上州  
 甘樂郡の山より出で  
 るより東北まで烏かき  
 川より入る長と二十里



神流川  
 武蔵上野の  
 國境に  
 埼玉縣群馬  
 縣の界あり



又左側より石寺のり林泉の勝あり水流まきと日正川とあり

驛の出口は舊荒川流る左あり荒川を全支を東南より流

深谷驛東京より十九里三十三町本庄へ二里三十町驛のナリと御道の右側より大木の

杉の並木列る驛賑しと北は瀧東管領山内房顕の城跡あり

川越の扇谷定正と常子戦争絶えざるま○廿四五町より岡部村を往時安部攝

津守二萬餘石の陣屋あり路の右乃普濟寺より岡部六彌太忠

澄の墓あり○岡村より坂を下りて小山川假橋あり南西

秩父郡の界より出て東北は流き利根川を入る

本庄驛東京より廿二里廿六町新町へ二里六町半入口より上り坂あり驛繁昌は絹

絲の産多し千六百五十餘戸三千五百七十餘人當宿より西へ七里より上州富

附九

岡より至るべし製絲場二里より神流川あり武藏上野乃

國界あり

新町驛東京より廿四里卅三町半此地より上野國緑野郡あり驛を

笛木新町落合新町より分る路中より金鑽神社あり又前橋へ

馬車路あり四里餘出口の左より肩絲紡績所あり器械巧妙

あり肩為七精○廿町より烏川を渡る○川を渡りて右鼻村

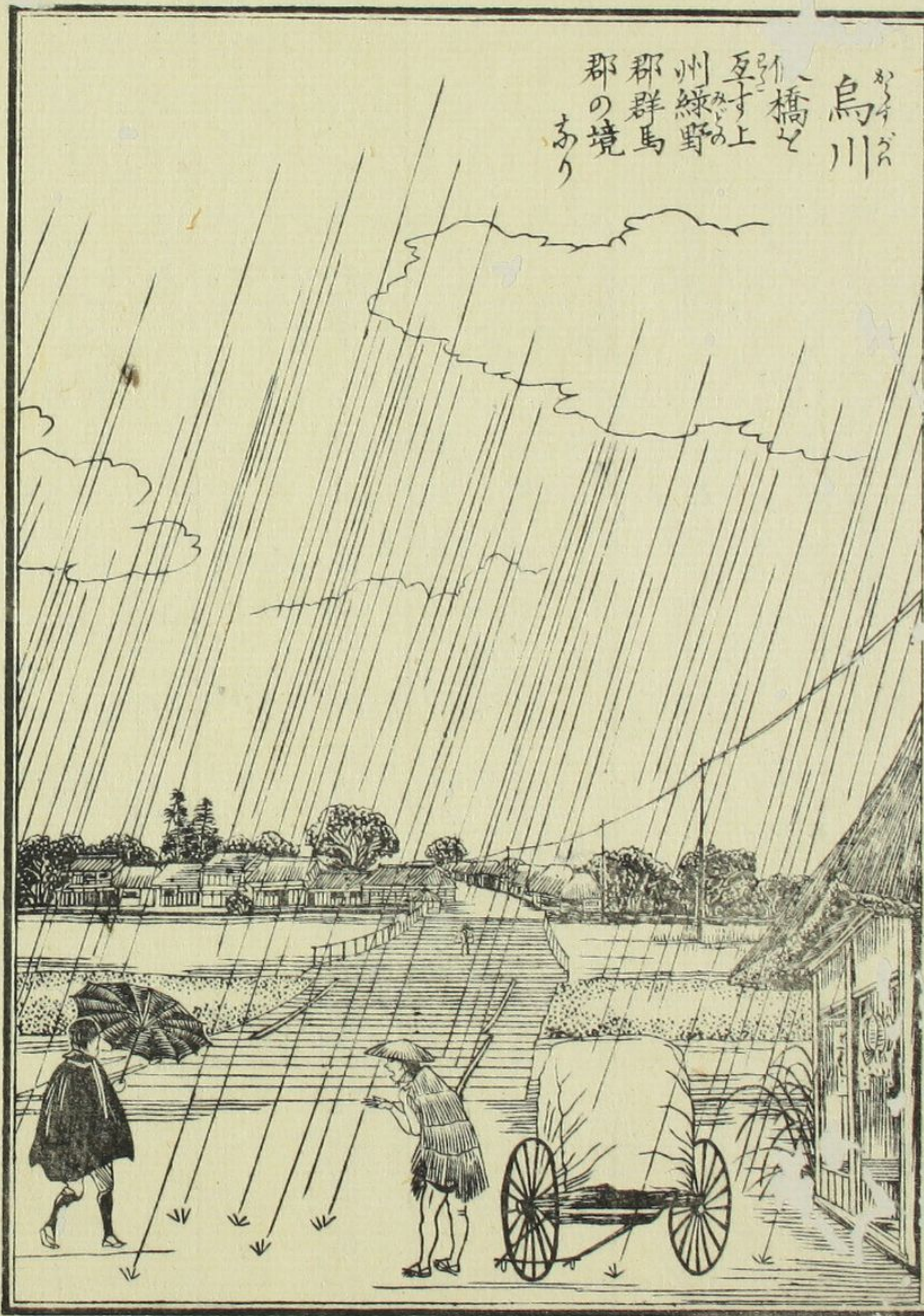
を至徳川氏の次代官を此處に置き武蔵六郡より上野の公

領四十萬石と我支配せしめあり

言賀野驛東京より廿六里廿四町高野へ一里九町入口より右へ例幣使御道分下野より

驛の烏川河岸より東よりへ下り川舟出づ○佐野村を萬葉集

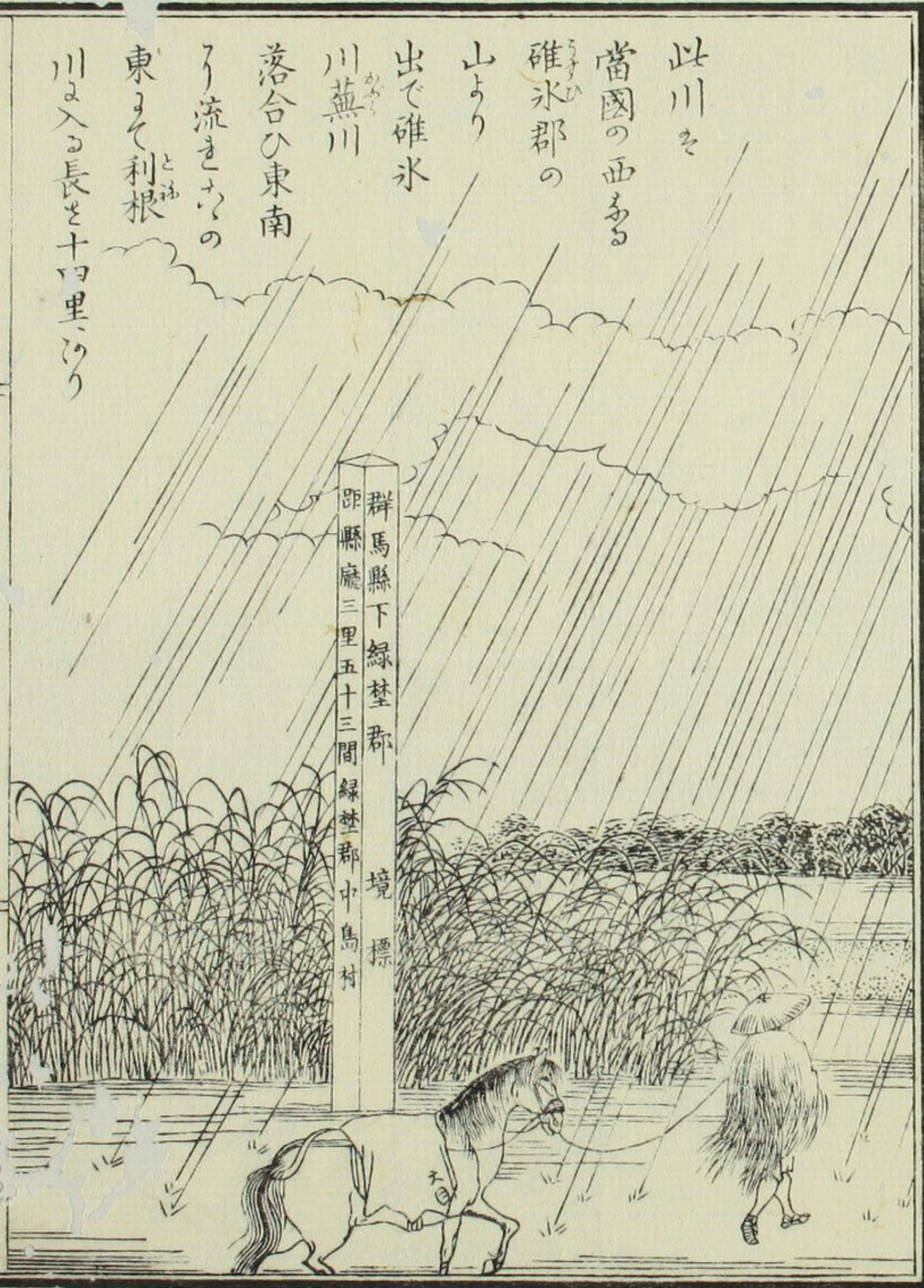
烏川  
弘橋と  
互上  
州緑野  
郡群馬  
郡の境  
あり



附十

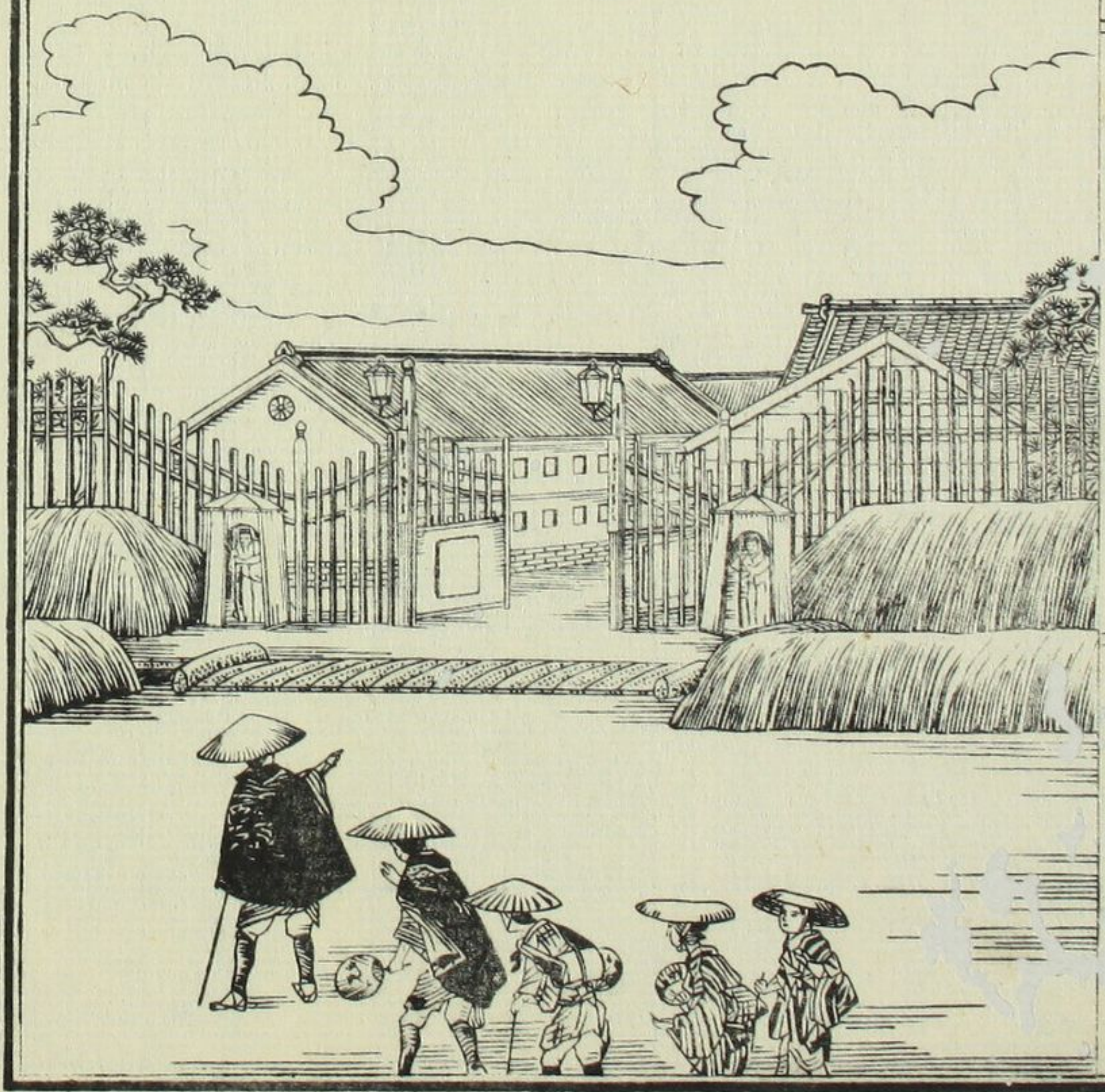
此川を  
當國の西より  
碓氷郡の  
山より  
出で碓氷  
川かみ燕川  
落合の東南  
より流るるの  
東より利根  
川に入る長を十回里あり

群馬縣下緑野郡  
即縣廳三里五十三間  
緑野郡小島村  
境標



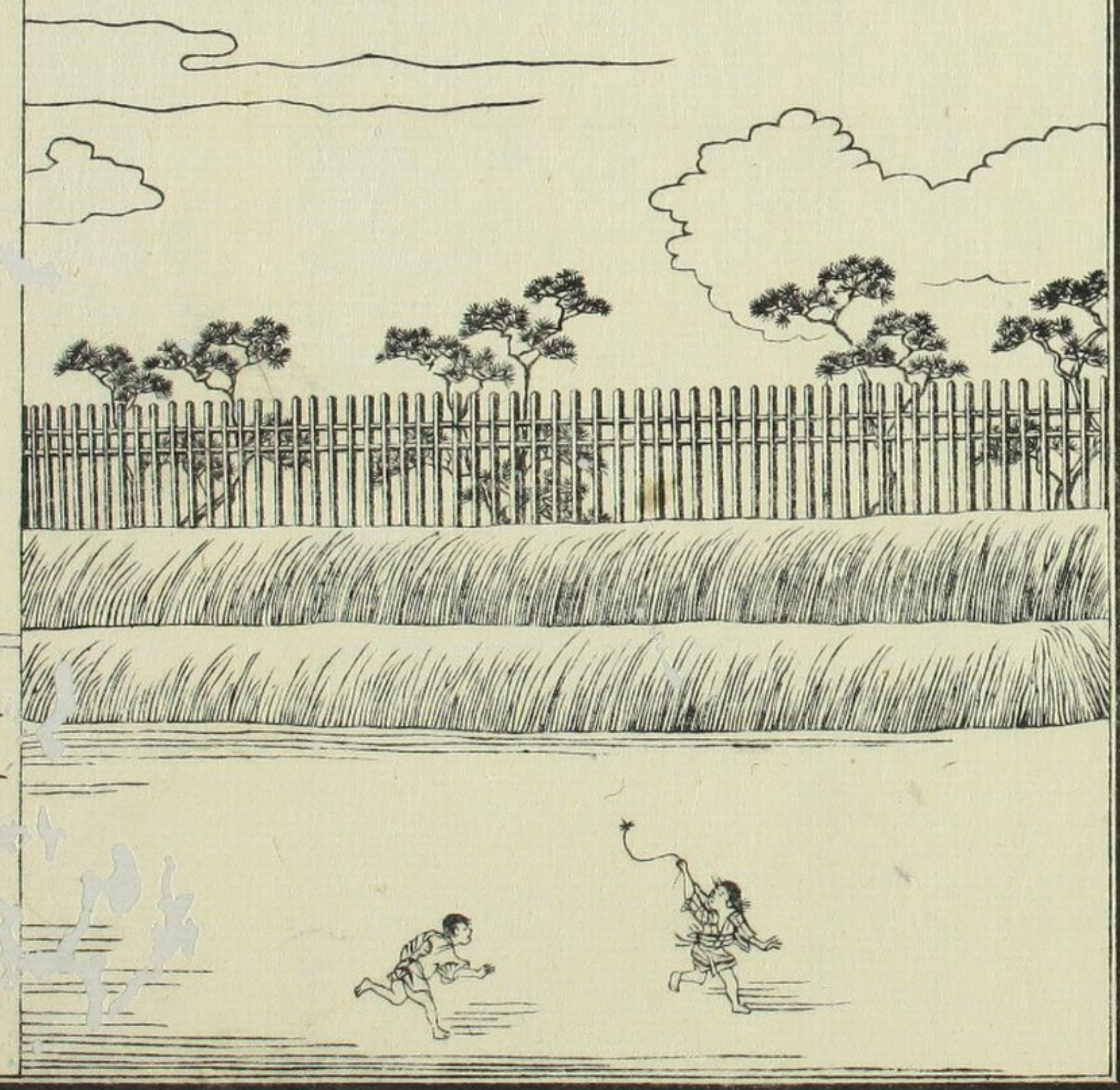
高崎城

舊名和田城鎌倉の頃和田義盛の六男義信築く慶長三年井伊直政修造



附ノ十一

し享保二年より松平右京亮輝貞封せられ維新の時より至る八萬二千石ありき今舊城をこぼちて東京鎮臺の第三師管本営とす



以下代々の歌集より佐野の船棹、佐野の中川、共よそのは 又謡曲の録の木より佐野源左衛門、つねよ 恆世の事を作ほしやも此地より附會しそその舊跡とせり

高崎驛 東京より廿七里三十三町 上野中央四通の都會はして繁華當國の第一あり市店稠密百貨輻湊す町南一里、戸数四千四百三十三人 戸人口一萬六千百十五人 西より東南へ貫き中仙道例幣使街道より北より三國街道より東を前橋へ南を富岡 三 通じ又西より草津信州への路あり驛の中央より高崎城より驛中より區裁判所電信局中学校女学校より頼政明神の境内と公園より大心寺より駿河大納言 徳川忠長、三代將軍の墓、沙皇

その外安國寺あや社寺多し

○前橋を高崎の東北 二里十 四町半より往時松平大和守 十七 川越より後より成せし菱絹糸の市盛ふ亦國中の都會なり 人口一萬二千三百餘人 群馬縣廳舊城也よりりて本縣上野全國十四郡を管す六十三萬餘石五十四萬餘口なり

伊香保路

高崎より伊香保に至るより二路あり本道を澁川路といふ 此路ハ人力車又馬車 車も通 凡七里廿三町道好けざるも遠し又支路を柏木路とす 又谷嶮し 凡六里十町より路近きればよきを常の通路とせり 此路を人力車を通じ馬或ハ駕籠の用意しそ



高崎たかしき 金古野へ二里廿四  
 町柏木村へ三里 高崎より路北へ折き三國街道へ出づきざりて  
 左より榛名の山々、右より赤城山中より持山々見て風景宜し  
 小鳥村より路分る

○澁川路

小鳥村より尚本道残行

金子驛かねこえき 澁川へ二里  
 二十八所餘 又一里行

まき北下村より小坂路  
 有馬村を和名抄郷  
 名子見ゆ又當村より若伊賀保

○柏木路

小鳥村より左より入る路狭く  
 次より高し井出村を和名  
 抄郷名よ出づ 本篇よ 又行  
 山より  
 柏木村へ二里 本名柏木浄あり  
 山腹じて茶屋より此をよりわ

神社より湯の上村より冷鏡

泉いづみ 何き山本端

澁川驛しぶせん 伊香保へ二里七町 真光寺より

足利の族澁川義頭あしひのむねの城趾

より東南より前橋路まへはしちみち 三里

より本道より左へ伊香保路

入る次第より山あり御野立の松

を路の左より 本文より

地藏河原ぢざいがはら 石地菘

此處より坂路十町登りて伊香保に至る

常に山の林麓を行くまわ山谷

多し一里より山峯林と云ふ

茶屋より路の左より船尾山時

つ瀧の澤 共本文 へ過ぐ

水澤村みづさわむら 伊香保へ一里十町 茶屋より村の西の

山より水澤観音の境内を過ぎ

行くと上り水澤山みづさわ 何き山本

黒澤あり小谷三ツ四ツあり

東京より伊香保迄

海川 三十五里十八町廿六間  
通 三十四里六町  
柏木

伊香保志上卷目錄

伊香保名義

伊香保村

温泉

泉質

功能

湯治心得

伊香保志

天啓癸卯

伊香保志上卷

東都 秋萍居士 輯

伊香保名義

伊香保の地名を萬葉集の上野歌子出でたるを最舊し  
 やしその外續日本後紀三代實錄延喜式にも出でその文字  
 も伊加保萬葉集、延喜式神名伊香保伊可保伊可抱伊香抱萬葉集伊賀保  
續日本後紀、三代實錄上野國神名帳の神名等種こり記せり且その指せる地今を  
 僅に温泉一村とされども往古をよの國の中央ある群馬  
 郡の西北に連なる今の榛名山相馬が嶽船尾山二嶽水澤  
 山を呼ぶる一帶の山々周二十餘里の麓せりける今これを

山と稱せり 伊加保山いかけほやま 言いふと論ろんは一一は萬葉集  
 小伊香保嶺の雷かみまことを雪ゆきといひ大おほ山やまより吹ふき起おこる風  
 ありは伊加保風いかけほかぜといひ或あるは伊可保の雨あめ雲くもまことを虹にじまどいひ  
 集中歌ちゆうしゆうかもいと多おほくつらほそも知しらるる以もついで今の狭せまき地名ちのみよ  
 つとくかくを言いふべけんや又今の榛名しんめの山中やまなかよりなる沼ぬまを即  
 萬葉集まんやふし以下いりかき中古ちゆうこの歌集かみより多く伊加保の沼ぬまと詠よみしるもの  
 ありやも思おもふべし且かつ或人の説せつより伊加保といへる名義なごうぎゆりの  
 大山珠おほやまたま子國こくにの直中ちゆうちゆうに備まへて嚴いつく大おほく秀ひでたるより嚴秀いつひかの  
 意いちあらざしといへる當あたまの 高千穂たかちほより山を保たもつと 又その昔朝廷むかしてうてん  
 より國くにの神社じんじやの格くわと定さだめ給たまひし時ときもその大山おほやまより座まを伊加

保たもの神かみありは乃な名神大座なみかみおほの事こと中卷伊香保ちゆうまきいかけほの神かみに定さだめ  
 られけの後世ちゆうせ地名ちのみも移うつり変かり至いたりてその神かみの座まを地  
 のみよりつとくづらふ小伊香保こいかけほの名な乃な殘のこりしあるべし 或説あるいふは  
 を湯川ゆがわの移うつりありとあるを後ちゆうの狭せまき地名ちのみよりつとく考かへり又村むらより  
 東南有馬村とうなんうまむら水みづ守まもり若伊賀保わがけほ小伊賀保こいかけほの名なを負おつる神かみ河  
 保たもの名なの廣ひろきをを知しる心こころし 今温泉いませんなる地ちを初はじめし伊加保嶺いかけほ  
 の山やまの地理ちり名勝なかつ跡あと古事ここと温泉せん名なの事ことを記しるる伊香保志いかけほを作つくる  
 伊香保村いかけほむら  
 當村たうむらを上野かみの國くに群馬ぐんま郡ぐんの西北せきほくなる連山れんざんの東北とうほくの麓ふもとよりあり  
 市街いちがいの地ちを上かみ山やまといへる嶺けより山やまの中なか腹はらの側そばに 乃な南みなみ  
 り山やまを負おひ西にしを谷たに小臨こりんみ前まへを正ただ北きたより稍東やよりひそく下さかり

伊香保町全景 東面

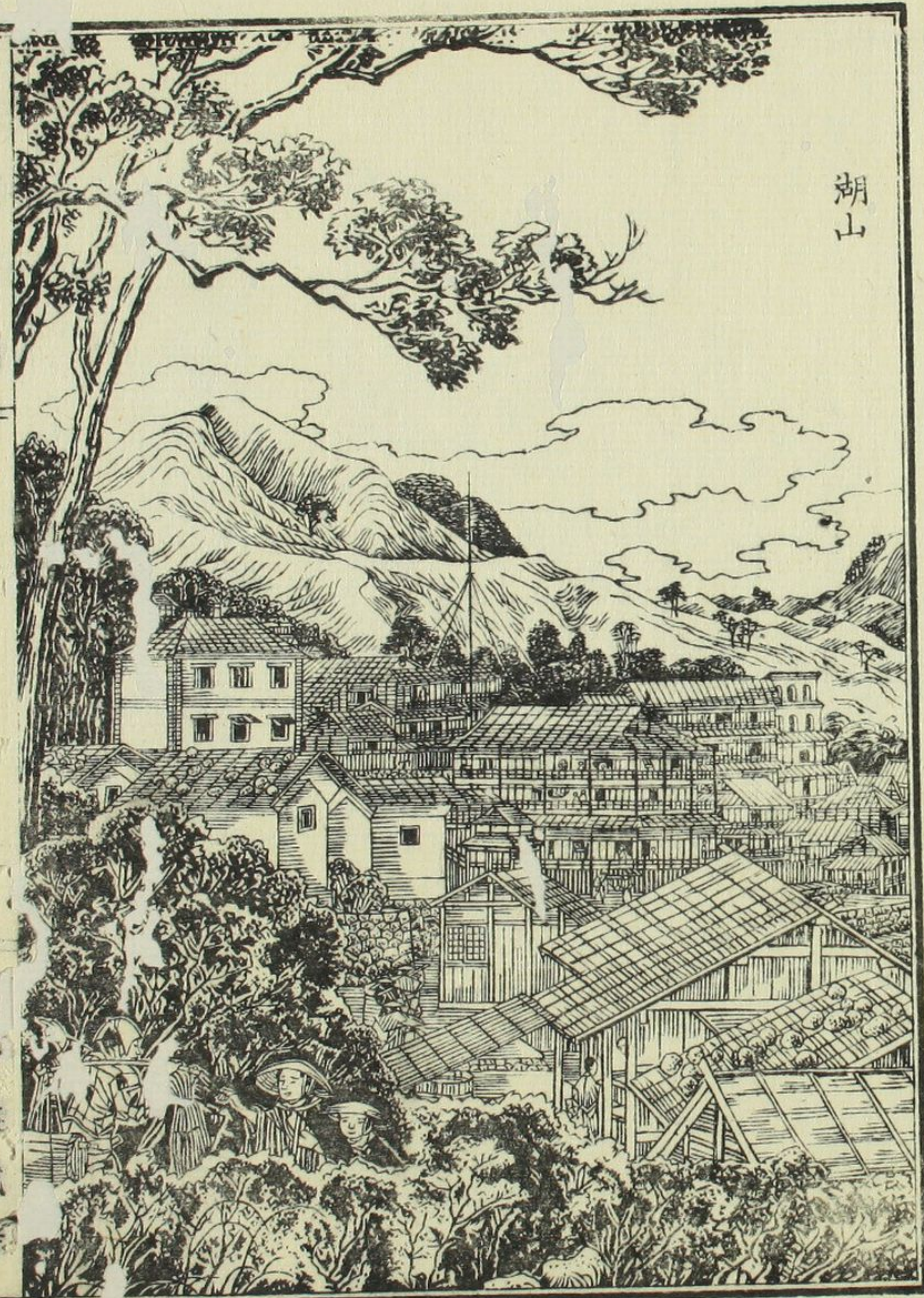
攀上香山路幾回  
温湯沸處一村開  
嵐煙亂入樓々曉  
多少游人託病來

磐溪

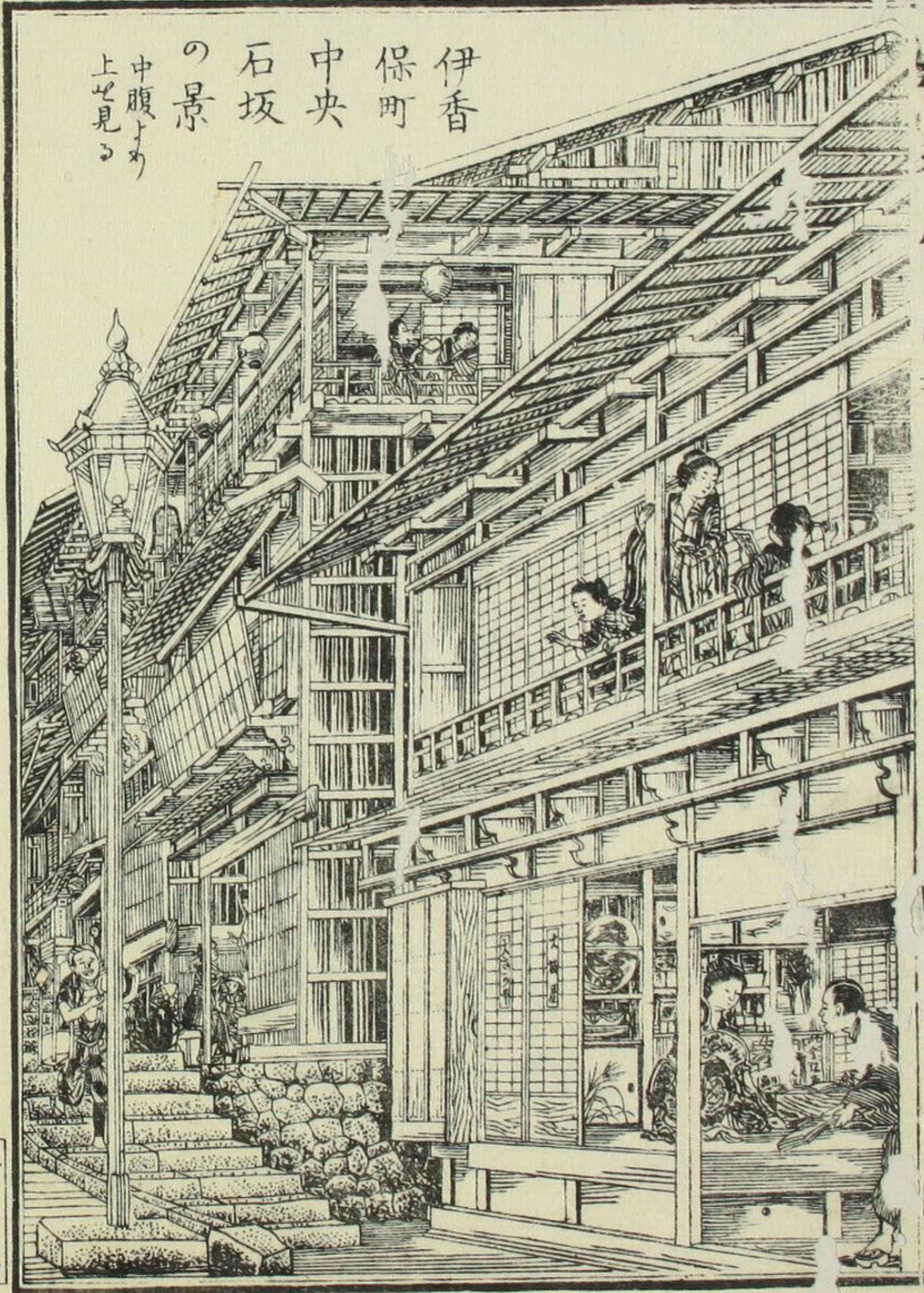
樓臺高架  
白雲邊  
不是禪拙  
不是仙  
又見化工  
多妙用  
一村奇福  
一條泉



湖山



伊香保町中央石坂の景  
中腹より上へ見



上ノ三

樓閣參差倚半天  
四來浴客此留連  
斷崖無地容耒耜  
一脈溫泉是福田  
中州



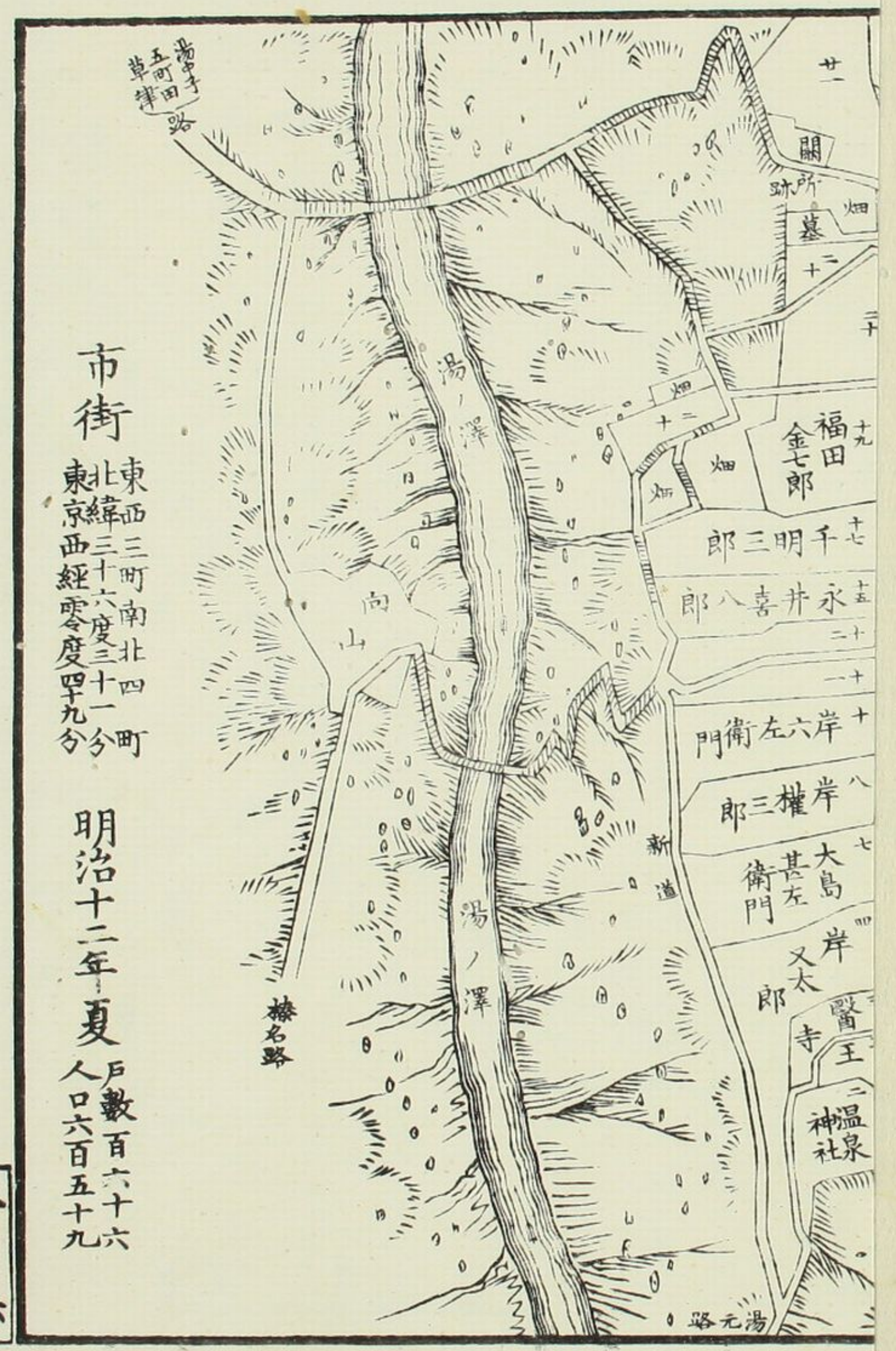
人家と崖とをぐり石垣と疊み宅地と故に家々の屋乃棟を一層を一層より其状階梯の如し此人家の族は地  
 の字と香湯と云ひ北緯三十六度三十分東京西経零度四十九分  
 緑威東経百三十八度五十七分三十分抄り市街東西三町南北四町棟數凡四五  
 百皆明治十一年春市中悉く焼失して後の新築あり  
 段々疊み所が人家左右に建ち並べ外裏町も一町あり  
 上町下町の稱あり町の最上と最下と温泉を町より  
 八町わが山の背あり寛く導き来り家々へ引き内湯と湯桶の事と詳次  
 此處の地勢海面より高きこと凡二千六百尺日光より高き五百尺  
 草津より低き二千尺山間雲嵐の中より一町あり常

子風多し且冬と寒氣甚し夕れバ家居と牆壁屋背皆板を用ふる然れども夏と空氣甚清涼よし極暑あるも尚華  
 氏の寒暖計の部は説けり八十度より昇ること少く朝夕凡  
 浴治最功能あるのみあらば清鮮の空氣人體を遠ひ且暑  
 暑我避と多し空しと又東京よりも程遠しとこれと夏を都鄙  
 の貴賤外國の人よりも浴するもの甚多しその盛なりとた  
 を一時凡四五千人の客以て輻湊して浴館各三層四層の  
 巨樓を作り皆數十の客室と以てを設ちつるも家々  
 殆空室なきに至り一年の浴客を算すれば凡三四万人  
 三四年來の夥しき不及と以て客の來ること四月より  
 の計算の夥しき不及と以て客の來ること四月より

子酒肆妓樓雜商舖演劇落咄等の場俱に簇つて崖を據  
 子笑語弦歌を閑泉幽禽の聲や相和して日夜絶えん  
 山谷間ある壺天の一熱境あり  
 当地より諸方への里程を左の如し郵便局あり四月より九月  
 ゆを日々に音信を諸方へ出せり十月より三月迄ハ隔日に出せり

當村の幅員を東西二十町餘南北四十町餘東を當村と他の六  
 箇村との入會秣場と界し南も他の十八箇村との入會秣場と

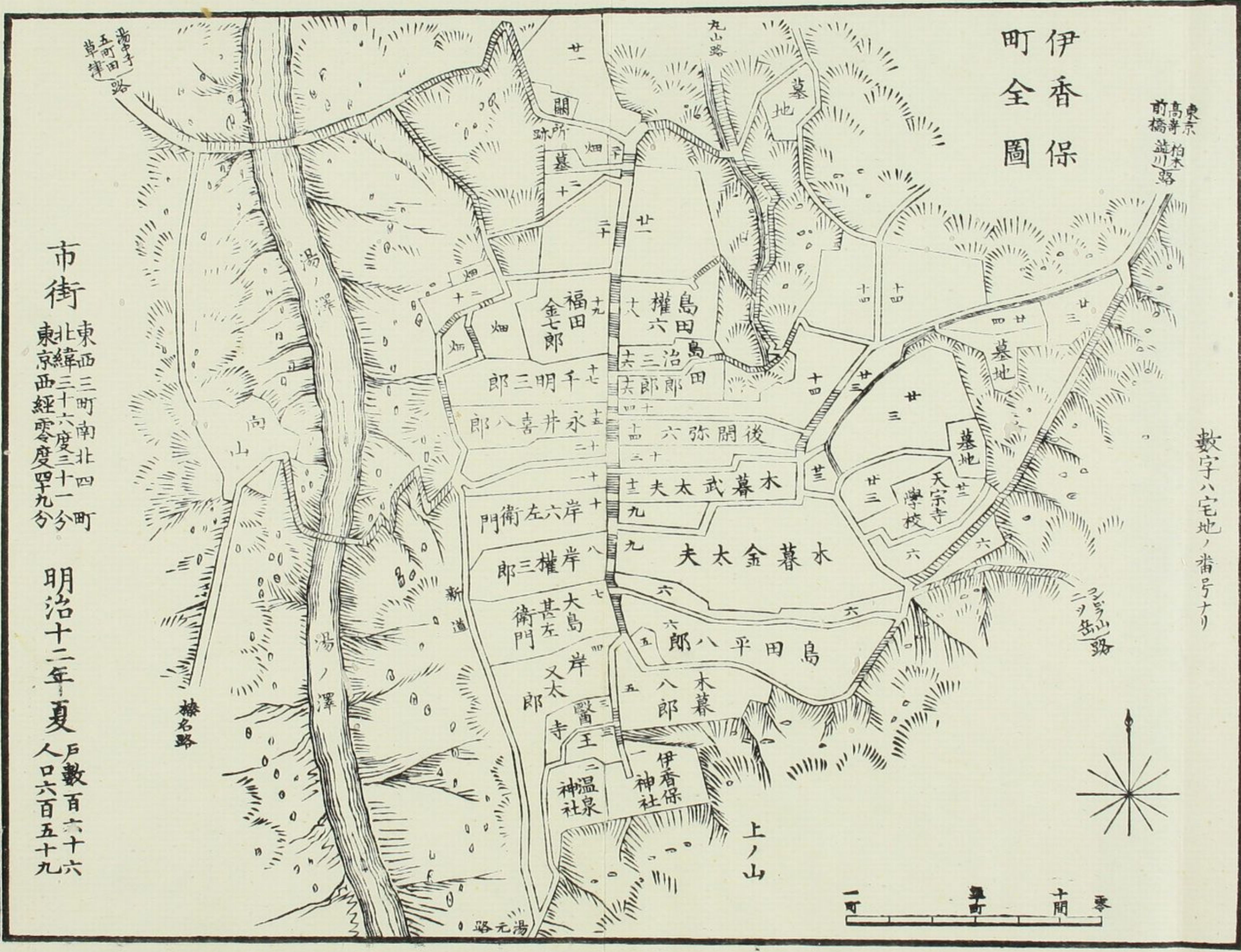
水澤村	東南一里十町	澁川驛	東二里七町	榛名山	西南二里半
前橋	東南六里	高崎	東南六里	東京	東南三十四里
四萬温泉	西南九里	草津温泉	西南三里		



市街 東西三町南北四町  
 東京西經零度四十九分  
 明治十二年夏 戶數百六十六  
 人口六百五十九



伊香保町全圖



東京  
高井  
前橋  
柏木  
遊川路

數字八宅地ノ番号ナリ

市街  
東三町南北四町  
西三町南北四町  
東京西經零度四九分

明治十二年夏  
戸數百六十六  
人口六百五十九

る上平二ツ岳<sup>うみのひら、ふたつだけ</sup>の境<sup>さかい</sup>し、西<sup>にし</sup>を春名村<sup>はるなむら</sup>、北<sup>きた</sup>を湯中子村<sup>ゆなかつこむら</sup>、祖母<sup>そぼ</sup>島村<sup>しまむら</sup>子<sup>こ</sup>隣<sup>となり</sup>る、一村<sup>いちむら</sup>の地<sup>ち</sup>大<sup>おほ</sup>拉<sup>ら</sup>山<sup>やま</sup>腹<sup>はら</sup>の陵<sup>りやう</sup>谷<sup>や</sup>より平地<sup>ひらち</sup>少<sup>すく</sup>く地<sup>ち</sup>質<sup>ちしつ</sup>黒<sup>くろ</sup>くくし、砂<sup>すな</sup>土<sup>つち</sup>浮<sup>う</sup>石<sup>いし</sup>と雜<sup>まじ</sup>り礮<sup>げん</sup>確<sup>かく</sup>に、水利<sup>すいり</sup>あり村民<sup>そんじん</sup>を香<sup>かう</sup>湯<sup>かう</sup>の一<sup>いち</sup>處<sup>しよ</sup>に集<sup>あつ</sup>まり往<sup>むか</sup>古<sup>こ</sup>を皆<sup>みな</sup>農<sup>のう</sup>あり、今<sup>いま</sup>を大<sup>おほ</sup>拉<sup>ら</sup>浴<sup>ゆ</sup>館<sup>かん</sup>を業<sup>ごう</sup>とし又<sup>また</sup>雜<sup>まじ</sup>種<sup>しゆ</sup>の高<sup>たか</sup>とある今<sup>いま</sup>一<sup>いち</sup>村<sup>むら</sup>の畠<sup>はら</sup>地<sup>ち</sup>四<sup>よ</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>町<sup>ちやう</sup>步<sup>ふ</sup>内<sup>うち</sup>宅<sup>たく</sup>地<sup>ち</sup>三<sup>さん</sup>町<sup>ちやう</sup>六<sup>りく</sup>段<sup>だん</sup>山林<sup>さんりん</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>町<sup>ちやう</sup>步<sup>ふ</sup>家<sup>か</sup>数<sup>すう</sup>百<sup>ひやく</sup>六<sup>りく</sup>十<sup>じゆ</sup>六<sup>りく</sup>軒<sup>けん</sup>人<sup>にん</sup>別<sup>べつ</sup>六<sup>ろく</sup>百<sup>ひやく</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>九<sup>く</sup>人<sup>にん</sup>なり、<sup>明治</sup>年<sup>ねん</sup>夏<sup>げ</sup>の澗<sup>ま</sup>より戸<sup>こ</sup>数<sup>すう</sup>を社<sup>しゃ</sup>寺<sup>じ</sup>役<sup>やく</sup>場<sup>ばう</sup>と合<sup>あ</sup>せ人<sup>にん</sup>口<sup>くち</sup>の内<sup>うち</sup>寄<sup>よ</sup>進<sup>しん</sup>百<sup>ひやく</sup>一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>なり、近年<sup>きんねん</sup>當<sup>たう</sup>地<sup>ち</sup>の繁<sup>はん</sup>昌<sup>ちやう</sup>年<sup>ねん</sup>より加<sup>か</sup>り宅<sup>たく</sup>地<sup>ち</sup>の地<sup>ち</sup>價<sup>げ</sup>一<sup>いち</sup>等<sup>とう</sup>あると一段<sup>いちだん</sup>三<sup>さん</sup>百<sup>ひやく</sup>坪<sup>へい</sup>より五百<sup>ごひやく</sup>廿<sup>じふ</sup>五<sup>ご</sup>圓<sup>えん</sup>の貴<sup>たか</sup>きなり、至<sup>いた</sup>り當<sup>たう</sup>縣<sup>けん</sup>下<sup>げ</sup>より地<sup>ち</sup>價<sup>げ</sup>の貴<sup>たか</sup>き々<sup>々</sup>高<sup>たか</sup>又<sup>また</sup>浴<sup>ゆ</sup>店<sup>てん</sup>の商<sup>しやう</sup>ふ高<sup>たか</sup>一年<sup>いちねん</sup>二<sup>に</sup>千<sup>せん</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひやく</sup>圓<sup>えん</sup>以上<sup>いじやう</sup>あると一<sup>いち</sup>等<sup>とう</sup>縣<sup>けん</sup>税<sup>ぜい</sup>十<sup>じゆ</sup>圓<sup>えん</sup>と定<sup>さだ</sup>めらるるといふ當<sup>たう</sup>地<sup>ち</sup>分<sup>ぶん</sup>

尹香保  
 天香樓藏梓

群馬縣管下は西群馬郡郡役所を高崎より一町あり菅村  
より戸長役場は隣村湯中、村の事務を兼祿又夏の間に  
警察分署を置き、澁川驛の本署より屬せしむ

温泉

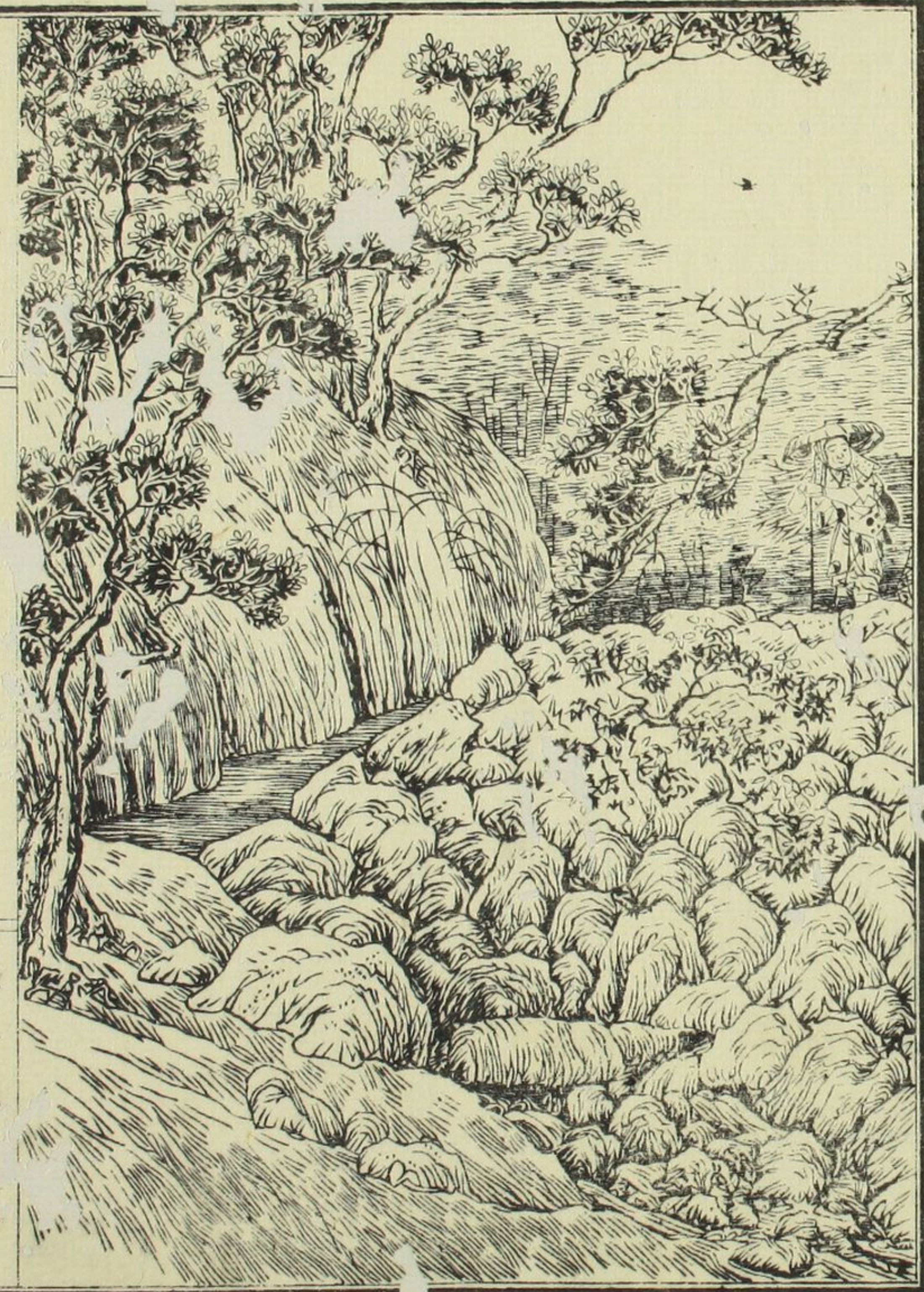
伊香保の温泉の源を市街の南の方湯澤の崖より沿ひて八町  
程山より入り湯元といふる溪間よりその溪乃奥ある崖の  
かふこより水をたより流き出づ涌きし處凡八箇所より土人を  
その涌口を釜と呼びて西入鳥の地獄吹出し竹筒をかきぐる等  
種々の名ありその中より熱きものよりぬるきものより温く滴々と  
しつゝ涌きしで湧き集りたりし溜り桶より引き堰より湛

へ又箕子導くこと八町あり市街の頭より東より石坂路の  
中央より上より下へ湯桶を伏せ處より堰を作し左右へ枝桶を  
分ちて家々へ引き内湯とて固より湯とあり低きへ湯を遣り  
のけたまを皆湯滝とす風呂場、落つ家々を設けたる  
風呂場の数を凡五十五箇所以下流を又集りて市街  
の下に水車ふかるとして遠近より田畑の用水とする温泉の熱度  
その末流を更に山下、遠近より田畑の用水とする温泉の熱度  
を四時於夕よりまはるひその差ありといふも夏の予時  
は大拉源に、華氏の百二十戸、風の度、風呂場は百  
十度乃至百一五度あり

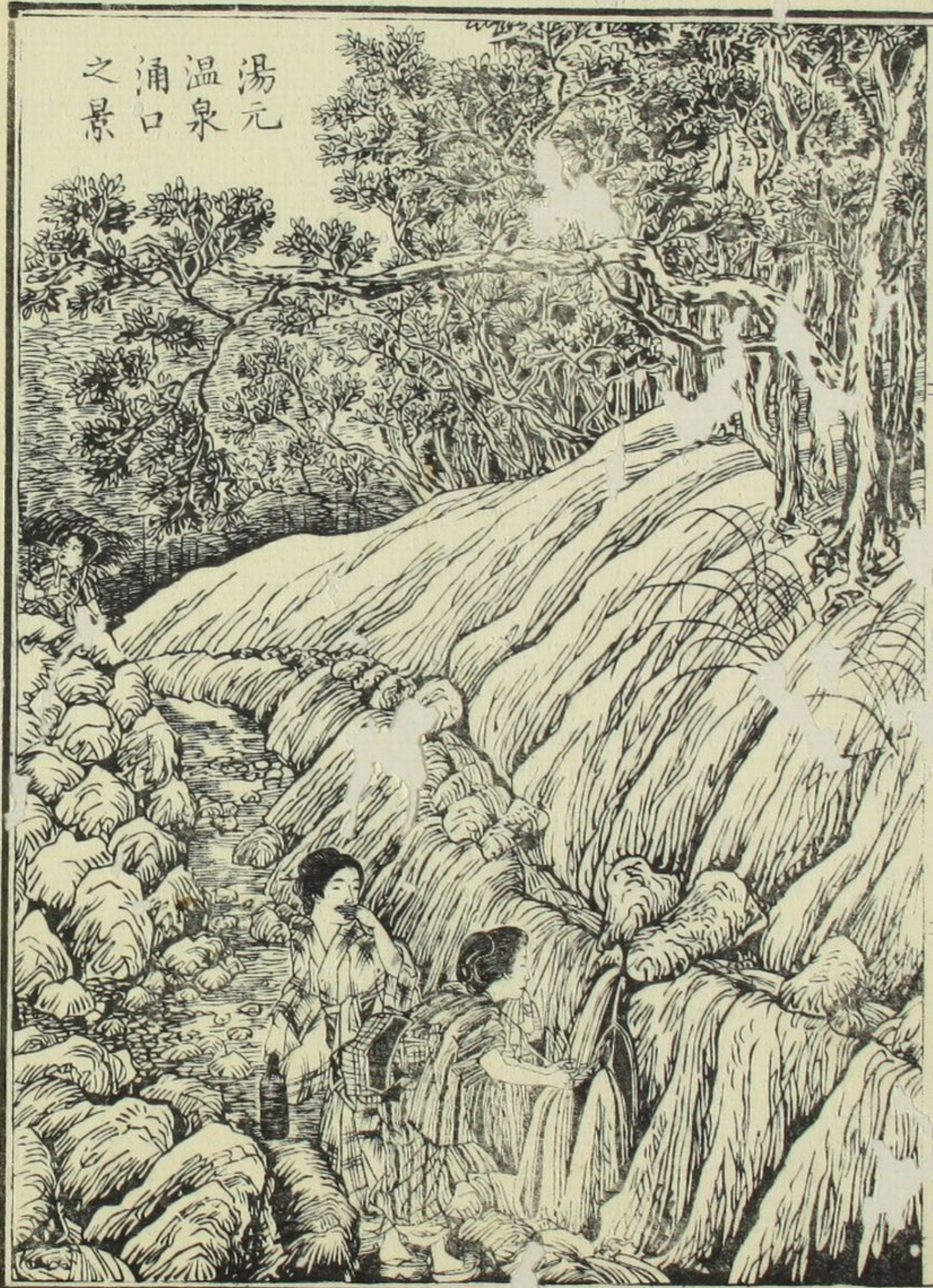
冬の大予  
熱と減む

湯元の溪間より五七年前

群馬縣志



湯元温泉之景



二ツ岳の蒸気の盛せ、頃々造りし蒸湯の窟の跡は、熱度の十分あり、程よく用ゐぬと云ふありぬ、ふい温泉の殊なり、ふりこまきを打き草木の枝乃萎れ、たふ湯に浸す時をたままらば、蒸せし或を鯉射金魚の類を湯の中に畜う、活潑泳ぎ、體肥え脂づくこと常の水を勝り又餘り水と田圃を溉ぎ、培養の功なり、あり大り他の温泉に異なる所あり、泉の色を源は透明きや、浴場ふ入き少し白く濁る、桶の中の埴土のまじりたるあり、善く味ふれば、鹹氣りり、香臭をば、源の涌口乃か、風呂場よりたきぞ失す

凡温泉の源泉敷地温泉涌く處の地價を各縣とも、その縣内の諸温泉の位格を比較平均して定めらるるといふ然るに、伊香保熱海箱根を繁昌格あり、第一熱海、第二伊香保、第三箱根と三處を相比し、第一熱海、第二伊香保、第三箱根と云ふ當地の源泉敷地を一段三百坪に付き、地價二萬九千圓の格位あり、但し當地の源泉敷地、その貴きたゞ、凡十五坪ありと云く、その繁昌を想ひ遣るべし

泉質

近き頃東京司樂場は、此地の温泉を分拆し、由て内務省衛生局の衛生雜誌才一、才二号に載せ、左の如し

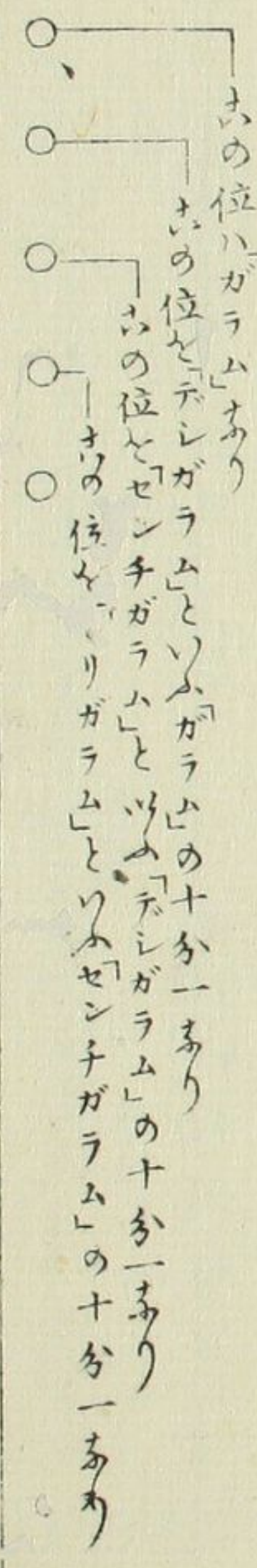
硫酸曹達 (区硝)	〇、六七七五グラム (一分九)
硫酸加里 (霸王鹽)	痕跡
硫酸マグネシア (吉利鹽)	痕跡
硫酸石灰 (石膏)	〇、一一二〇グラム (三厘)
鹽化ナトリウム (食鹽)	〇、三一五八グラム (八厘五毛)
鹽化カリウム	痕跡
重炭酸石灰 (石灰石)	〇、一九八〇グラム (五厘三毛強)
重炭酸マグネシア	〇、一一九〇グラム (三厘九毛)
重炭酸亞酸化鐵	〇、〇〇七一グラム (一毛九弗)
珪酸	〇、〇三五〇グラム (九毛四弗)

上ノ十

總量

一、四六四四グラム (三分九厘五毛強)

右を「リートル」の中ヲ含める分量なりと以テ「リートル」と  
 左升目の名あり十「センチメートル」立方をなす者三寸三分三  
 厘三三三立方に「華氏」の三十九度、二の温度ヲ以テる水  
 の嵩に量る凡五合五夕弱重を二百六十六又六分六厘六毛  
 程あり又「グラム」を秤目の名あり「リートル」の千分の一は  
 重を二分六厘六毛六あり前の表の中に、を打たる位  
 を「グラム」にその以下の位を左の如し



右の表の中より硫酸曹達(芒硝)ナドをトに注せるを假(かり)當(あた)りたる常(つね)の薬(やく)名(な)なり又(また)カラムトに(何分何厘)など記(しる)せるもその薬(やく)を量(りょう)目(め)に當(あた)り記(しる)せるなり痕(あと)跡(せき)といふづりふその薬(やく)のつらさをしりみあるを云

功能

衛生雜誌(せいせいざっし)よりその温泉成分(せんぶん)の中に主(しゅ)とせらるるものと硫酸曹達(りゅうさんそうたつ)と塩化ナトリウム(えんかナトリウム)とあり解凝(かいぎやう)下(げ)の功能(こう能)ありて左(ひだり)の諸病(しよびょう)によりとあり

○胃弱(いじやく) 飲食(おんじ)せしめり  
 右(みぎ)の病(びょう)に温泉(おんせん)を飲(の)み効(くち)ありと云(い)ふ  
 ○白帶(はくたい)ト ありあり  
 但(たゞ)し一度(いちど)一盃(いちざい)より三盃(さんざい)までなりかぎり  
 ○經久(けいきう)惡性(あくせい)癩(れい)麻質(ましつ)私(し) 風疾痛風(ふうじつつうふう)の類(るい)の長(なが)びきたる病(びょう)

○腰痛(ようつう) 腰(こし)の痛(いた)む疝(せん)氣(き)  
 ○鑛毒(こうどく)より来(き)たる麻痺(まひ) 錫鉛(しやくけん)などかふけの毒(どく)なり  
 ○皮膚病(ひふびょう)即(すなわ)ち麻疹痘瘡(ましんとうそう)より發(は)したる頑癬(がんせん) 瘡(そう)瘡(そう)けりくはし  
 右(みぎ)の諸病(しよびょう)よりハゆつみしと効(くち)あり

○貧血病(ひんけつびょう) 血(ち)の不(ふ)足(そく)しと色(いろ)の白(しろ)をさむる病(びょう)  
 ○子宮官能變常(しよきうくわん能へんじょう)即(すなわ)ち月經不調(げつけいふてう)等(とう) 婦人(ふじん)のやぶりの常(じょう)の如(ごと)くありぬ病(びょう)  
 右(みぎ)を飲(の)むと浴(ゆ)するも効(くち)あり

又(また)日本温泉獨案内(にっぽんおんせんどくあんない) 明治十二年(めいしじふにねん) 出版(しゅつぱん)一冊(いっさく) 伊香保(い香保)の部(ぶ)の事(こと)の泉質功能(せんしつこう能)を記(しる)せり今(いま)他(た)を省(しょう)き伊香保(い香保)の部(ぶ)の事(こと)を記(しる)せり此(こゝ)より擧(あ)げたる類別(るいべつ)を左(ひだり)の表(へい)の如(ごと)くにしる

鑛泉

冷泉

温泉

- 第一 中性泉
- 第二 無氣酸泉
- 第三 有氣酸泉
- 第四 含鹽泉
- 第五 亞硫酸泉

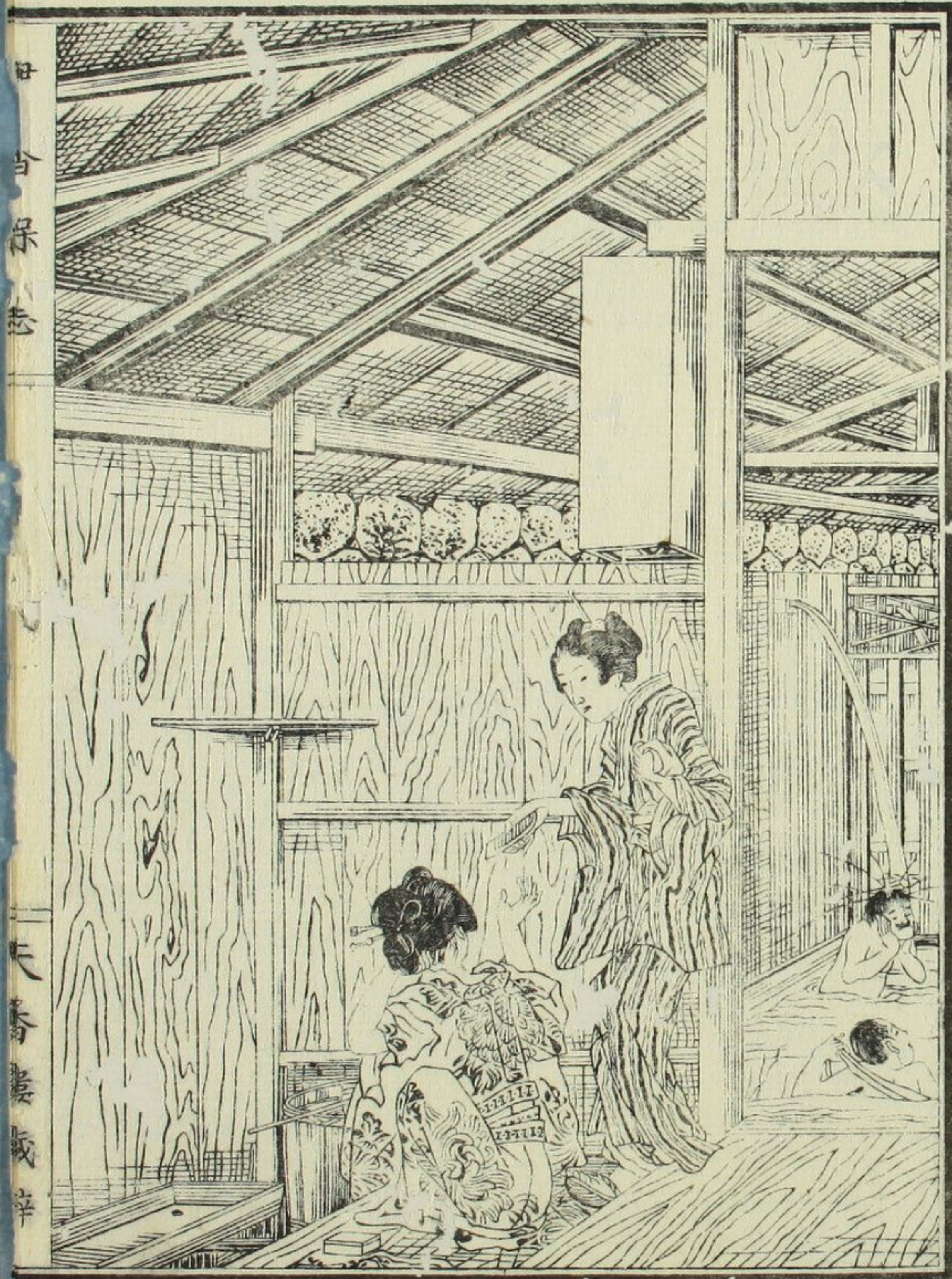
- 硫酸鐵泉
- 石膏泉(伊香保泉)
- 酸化マグネシア泉
- 鹽泉

含鹽泉といへるを多量の溶塩を成り且少許の炭酸を  
 含める類の温泉の總名に之を又その中にて分る石膏泉  
 を以て之を伊香保の泉質を當り之を云此石膏泉 即含  
 酸石の質を多少硫酸石灰 即石膏の 含有その味淡として  
 石鹼を溶き事なく且服用すること甚多は之その機能を  
 皮膚の諸病 收縮の性ありと瘰癧となり宜しやといへり  
 下野那須の板室肥

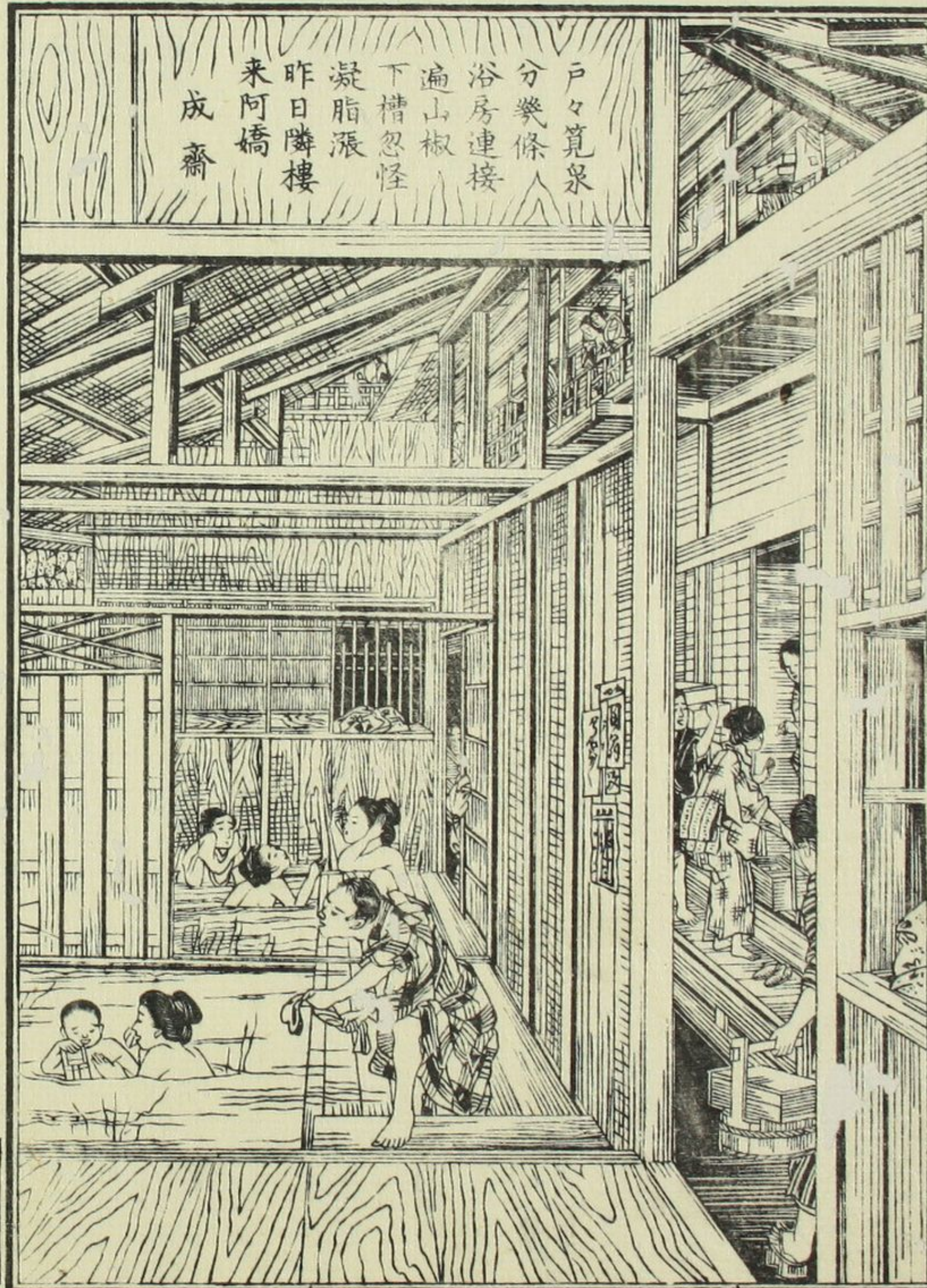
上ノ十二

前嬉野武雄并テ佛國のピニトパ  
 リ等の温泉これと同じやといへり  
 以前の衛生雜誌  
 の説と甚異同一りの参考をせし又同書より伊香保温泉の  
 熱度を記し之を四十五度やせり是を攝氏の寒暖計にて測  
 るるより攝氏の寒暖計とセルシウスを以てする人の造る  
 るに佛國より多く用ゐるものありその百度を水の沸騰點  
 中ハ華氏の寒暖計やをフーレンهایتを以てする人の造る  
 るに英國米國に多く用ゐる是を百八十度を沸騰點を  
 せられど 三十二度を 攝氏の度より九を乗じ五を除し三十二を  
 加ふれば華氏と同じ度とある即華氏の百。度より當り  
 百十三度

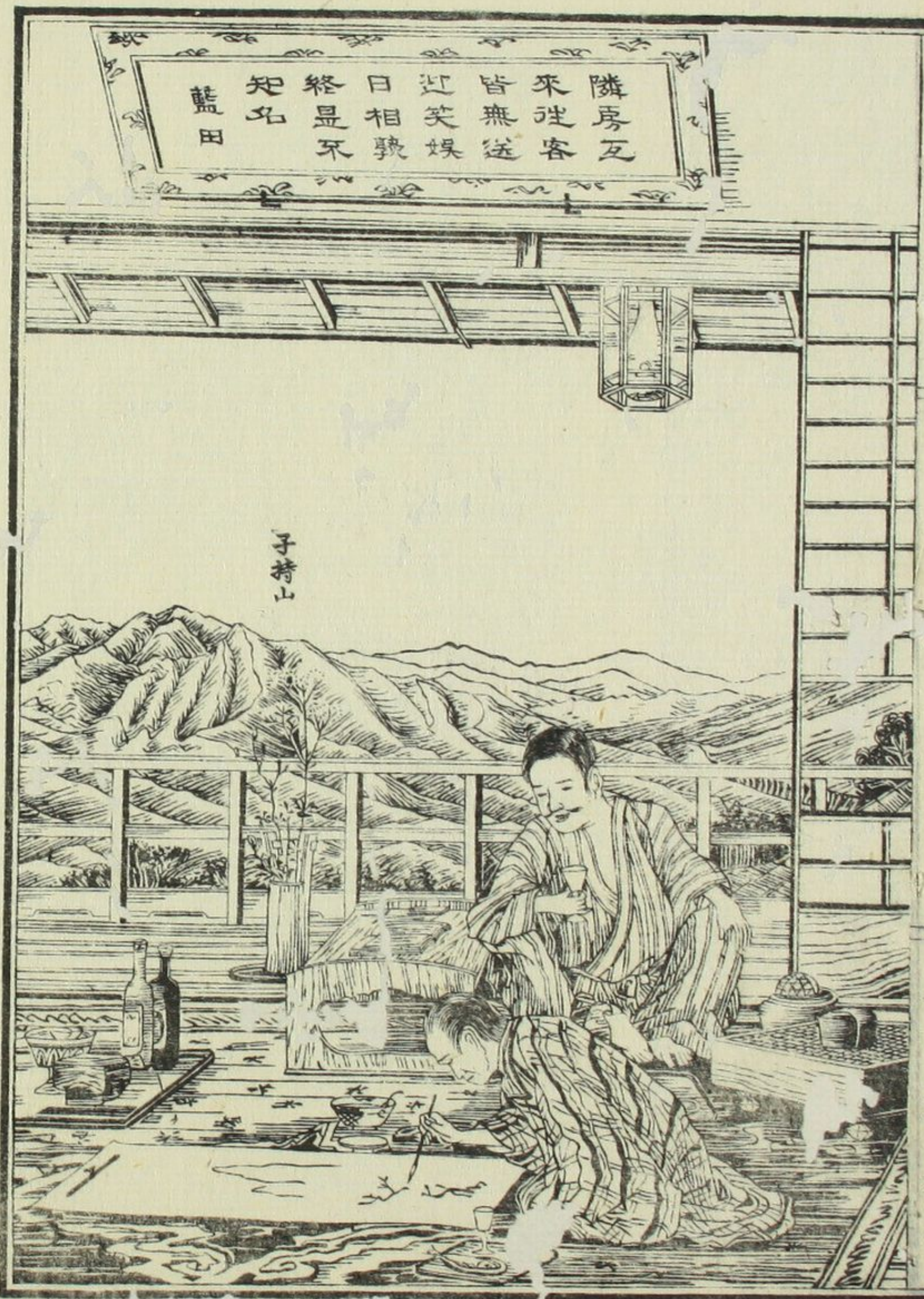




戸々窺衆  
分幾條  
浴房連接  
漏山椒  
下槽忽怪  
凝脂漲  
昨日隣樓  
来阿嬌  
成齋



隣房互  
來往客  
皆無送  
迎笑娛  
日相談  
終是不  
知名  
藍田



子持山

御香備志

天香樓藏本

男兒山接拈  
兒峯人說靈  
泉治子官絃  
索聲收烟月  
暗何樓半夜  
夢羅熊  
鞭後宇主人



野子山

天香樓藏本

天香樓藏本

湯治の心得

温泉に入ると病を治むることもよりの醫業より次ごとく以ん  
 ばも温泉の質よりなる諸病より功能異なり伊香保温泉の  
 泉質功能を前日挙げたるが如し良醫より就きて問ひ善く  
 その病より適くやく否とを考ふべし然し入浴するの法も  
 亦安んずれば却て害あり依て衛生雜誌その他諸書の意  
 を集めて左より其心得を記す  
 湯治を一年四時共より宜し浴する温度を病愈より全を掃ふに  
 甚熱きと用ふることも病愈に大抵を華氏の九十八度乃至百  
 度を定度とす又そのつらさあれば過ぎ左わとも常の水を

注まざるべし湯を冷し入ると湯治をばき時日一  
 しがととついで凡三週二十一日を通例の期限より尚病  
 長短又長病の者のその病を根治せんやと考ふる者毎年程と  
 する時候より至るがごとく湯治するを宜しや入るに数日  
 病の烈しとあることあるもその愛症の後却て快業より赴  
 くとことつら心得るべし又短くも一週の間を一處の温  
 せ試むべしとて湯治を月日を歴て功能するものと知る  
 べし浴する度数を年々の人より一日より二三度不限り  
 小兒と虚弱なる人を一日より一度と定むべし度に入る程  
 功能力ありしと思ふを大なる誤り也却て之れを知りし  
 入

湯の時刻を然るを宜しや入湯入居間も十分あり  
十五分まであらざし但し微温の湯あらば三十分までを  
○湯を飲む病にありて分量を差たりといふも大抵一度  
一盃凡五凡五四五盃止まらざし是まを決して多く飲む  
うづ但し朝飯前と午後の空腹より二度飲むべし且熱湯  
を宜しうづ又一度より数盃飲まんとするときは一盃の間を  
まてし運動しを凌ぎ又飲むべし一度に續けて飲めば吐  
氣を催す事ありざし又飲む湯を湯元の涌口へ至り汲み取  
て用ゐるべし○湯を飲み又を湯入り入るる後凡一時間を過  
ざれば飲食をせざらば又飲食の後一時間を過ざれば湯

入る又湯を飲むべし  
入浴の心湯を大抵右より言へるが如し然まづ尚病により殊  
老人小兒を飲む入るも宜しき程を慎むべし去る湯浴を  
醫藥の力を補助するものや心得べし且温泉なる土地を大  
抵山地より多々れを空氣も常に清鮮より且家を多々れ  
旅中より何れも家事をおこなふこと最養生とあるを  
故に身持を善くし物を風く起ま夜を早く寝居間衣服未  
だ淨くし殊に飲食を以てん最も房事を物事より心配  
安然やして樂むべし此れ湯治養生の本旨あり人々も  
まが湯浴より去る日日夜夜遊樂に耽る飲食の度を過し

藪をききため我人どル<sup>ミヤ</sup>ク<sup>ミヤ</sup> 静養の道<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>く<sup>ミヤ</sup>るもの多し深<sup>ミヤ</sup>く  
 慎む<sup>ミヤ</sup>べき事<sup>ミヤ</sup>なり又客<sup>ミヤ</sup>を<sup>ミヤ</sup>暑<sup>ミヤ</sup>を<sup>ミヤ</sup>避<sup>ミヤ</sup>く<sup>ミヤ</sup>るが<sup>ミヤ</sup>為<sup>ミヤ</sup>り来<sup>ミヤ</sup>る者<sup>ミヤ</sup>多<sup>ミヤ</sup>く<sup>ミヤ</sup>は  
 夏<sup>ミヤ</sup>々<sup>ミヤ</sup>雜<sup>ミヤ</sup>還<sup>ミヤ</sup>する<sup>ミヤ</sup>こと<sup>ミヤ</sup>殊<sup>ミヤ</sup>り<sup>ミヤ</sup>甚<sup>ミヤ</sup>し<sup>ミヤ</sup>故<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>實<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>病<sup>ミヤ</sup>の<sup>ミヤ</sup>為<sup>ミヤ</sup>は<sup>ミヤ</sup>して<sup>ミヤ</sup>閑<sup>ミヤ</sup>暇<sup>ミヤ</sup>多<sup>ミヤ</sup>  
 き人を四五六月の頃<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>到<sup>ミヤ</sup>る<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>客<sup>ミヤ</sup>を<sup>ミヤ</sup>旅<sup>ミヤ</sup>亭<sup>ミヤ</sup>や<sup>ミヤ</sup>共<sup>ミヤ</sup>に<sup>ミヤ</sup>便<sup>ミヤ</sup>利<sup>ミヤ</sup>ある<sup>ミヤ</sup>べし

伊香侍志上卷了

